

536
111



始



エト 4H-75

死とその神祕

フミマリオン著・大沼十太郎譯

アルス刊

大正
14.6.27
内交

536-111

譯者の序

本書はフラマリオン氏の名著ランコニー（拙譯「未知の世界へ」）の刊行後に於て尙廣く蒐められた幾多最近の實例、觀察、報告に基づいて更に前研究の範圍を擴大し、例に依つて實證科學の見地から精細にこれを分類し、著者一流の深刻鋭敏な解明を試みたものである。

若し前著「未知の世界へ」がその實證科學の鍵鑰を以つて前人未到の靈界を劃せる神秘の扉を開き得たものと言ひ得べくんば本書は正にその核心に觸れんとして究明の第一步を踏み入つたものと言ひ得やう。科學の前に神秘はない。超自然はない。

大正十四年二月麻布の寓居にて

譯者

目次

第一章	最大の問題——それは果して究明され得べき問題か……………	三
第二章	唯物論——不合理な學說……………	五
第三章	人は何であるか。心靈は在るものか……………	六
第四章	未知又は多少未知の心靈の超自然的作用……………	一〇
第五章	言葉もなく、合圖もなく、而も遠方から作用する意志の力……………	一八
第六章	隔感現象と遠隔の地に於ける靈的傳達……………	二二
第七章	眼に依らない視力。遠感相通現象を除く靈的視力……………	二五
第八章	未來視力——事前の豫見——夢中經驗（豫め夢に見る事實）……………	三〇
第九章	未來の知識……………	三三

死
と
そ
の
神
秘

第一章 最大の問題——それは果して究明され得べき

問題か

生きようか、生くまいか

(シエクスピア)

予が本問題の研究に手を棄めて既に五十餘年、而かもまだ充分満足を感じる程の解決を得てゐないのであるが、今日思索する人々の爲めに、兎に角、予が過去の研究の結果だけを茲に發表する事にした。

科學的實驗方法——それは眞理を覓むる上に唯一の價值ある手段であつて、吾々がこの問題の研究を繼續する以上、この方法は避けることの出来ない、又避けてはならない要求を齎すのである。本書に論ぜられる重大な問題は最も嚴肅な、そして最も複雑な事柄である。即ち小にしては狹隘な小天地に棲息する人類から、大にしては絶對無限の大宇宙に關係した問題である。吾々の青年時代には何物にも負されぬ自信があつた。前には永い生涯が展がつてゐた。そこで果てしもない種々の問題の研究

を始める。けれども如何に長い生涯も、その光と影と共に夢のやうに過ぎ去て了ふ。所謂、世事は千變するが人生に百年はないのである。故に、若し吾々の生存してゐる間に一つの願望を有つとしたら、假しそれが如何に遅くとも確實に人類の進歩に貢献する事であればならぬ。尠くとも人類の動物的状態から全く脱したものでなければならぬ。一體、人間といふものは随分氣紛れなもので、存外輕信家が多いかと思ふと、懷疑家も少くない。有徳な人があるかと思ふと、一方には犯罪人も出る。超然家がゐるかと思ふと、極めて物好きな世話焼家もある。謂はゆる世は様々、大體として、まだ人間は本當に野性的境遇を脱しては居らぬ。

曩に拙著「生息可能なる世界多々あり」の第一版が発行された時、讀者の中には當然出づべき後編の「靈的存在者數多あり」を期待してゐる人があつた様に思はれた。そして前者の諸問題が続いて刊行された通俗天文學、火星、ユラニ、ステルラ、星の夢等の予の著書で解決されたとしても、後者の諸問題は尙ほ依然未解決のまゝになつて居る。靈魂は何れの處に生き残つてゐるのであるか、空間か、他の世界か、抑も亦、再び化身して吾が地球の上に戻つて來るのであるか、今、これ等の怖ろしい諸問題は、人類最大の疑問として吾々の前に直面してゐるのである。

銀河の横はつてゐる無限の空間を越えて、飛んで來た原子の中に齎された所の考へる原子、即ちそ

れが人間となつた事を考へる時、自分は肉體のやうに心靈に於ても何等意味のない拙らぬ物であるまいか、進化の法則は何の高さまで自分を引上げて行くのか、世の中には物理的世界の秩序に相應した道德世界の秩序と云ふものが本當に井然として存在してゐるものであらうかと考へるのは尤な事である。

更に又考へる。心靈は矢つ張り物質より優つてゐるのではないか、吾々の眞の性質とは一體何んなものであらうか、吾々の未來の運命は何うなるのか、吾々は一瞬間輝いて、そして永久に消え去つて了ふ儚かない焰に過ぎないのか、一たびあの世に旅立つた相愛の人々には、如何にしても二度と逢へぬものであらうか、別離は果して永久に續くものか、死は何人も免れ得ないものか、若し何物か残るとしたら、それは到底釋ることの出來ない、眼にも見えない、そして極めて漠然としてはゐるが、併かも立派に意識され得る人格的要素であらうか、その要素は長い間續けるものか、それとも永久に存在してゐるものであらうかと。

生きようか、生くまいか？ それは凡ての哲學者、思索家、宗教家、そして主義者達に依て繰ねられて來た永い間の重大な宿題であつた。死は生の終局であらうか、或は變形であらうか、生きた有機體が破滅して了つた後、なほ人間が生存して居ると云ふ事に就て、何か確かな證據があるのか、事實

此問題は今日まで科學的觀察の範圍外に置かれてあつた。けれども既に人類は凡ての實驗に依て科學の進歩を實現させて來たのである。然らば何處までもこの實驗主義に則つて一步一步宿題に近づいて行くことが論理に適つた唯一の研究方法ではあるまいか。今、吾々は現在の五感の前に存在する世界とは異なつた他の世界、實證科學的研究方法では、迎も這入る事の出来ない神秘的な世界に直面してゐるのではないかといふ事を考へる時、それが極めて細心に、慎重に、そして正確な觀察の下に深く探究して行つたならば、ある事實が科學的に分析され得るものか、何うか、そしてそれが嚴格な批判の下に實際に承け入れる事が出来るか、否かを確め得ると信じる。吾々には最早、美しい言葉も、形而上學も必要がない。覓むるものは唯た事實だけである。眞理である。換言すれば吾々の運命、吾々の天命、吾々個々の現在とそして未來に關する眞想である。だがこれ等の問題の解明は單に冷たい理性から許りの要求ではない。それは實に吾々滿身の熱望であり、衷心からの憧憬である。

この場合、自分を持ち出すことは、多少自惚れの結果の様にも見える。けれども、それは自分は元々此の問題と離るべからざる因縁を有つてゐる結果であつて、予が本問題の研究を始めた動機は主として悲める人々に應へる爲めであつた。それ等の關係から五十餘年の間には種々の不思議な事件に煩悶してゐる有らる階級の人々から、その解決を求められた夥しい親展書が予の手許に集まつて居る。

予は本書の卷頭に故ら凡庸な序文を書くよりも、正直に事實を叙べてゐるこれ等の書信の若干を茲に掲げる方が却て意義ある事と思ふ。

深く愛し合つてゐた人と未だ死別した事のない人々には、本當に絶望の深みを探つた記憶もなければ、墓場の固く閉された扉に體を打ちつけて自ら傷けるやうな経験もない筈だ。けれども吾々の常に遭遇する恐怖の前には、如何にしても入り込むことの出来ない厚い壁が衝き立つてゐて頑として動かない。予は何百となく眞面目な訴への手紙を受取つた。そして、それには一々返事を出して置いた。予は又、これ等の秘密を世間に發表する事の可否に就て随分迷つた。長い間躊躇して居つた。言ふまでもなくこれ等の手紙は何れも極めて眞剣な訴へであり非常に熱烈な希望を表はしてゐるもの許りであつた。然るにその問題は間もなく世間一般から著しい注意を以て迎へられるやうになつた。最早一個人の特殊な出來事や秘密ではなくなつた。そこで始めて予の義務が明瞭になつた譯である。故に一面から觀ると本書は隨かにこれ等の人々の感情の表現である、結晶であると言つても差支はないのである。唯だ茲に私信を紹介するに在りて一言斷つて置きたい事がある。それは書信の多數には予として聊か羞赧を感じる賞讃の言葉を與へられた事である。然も予がそれに何等の改削も施さずに、故らその全文を掲げたのは、實に筆者の眞摯な告白を尊重する意味からである事を諒解して貰ひたい。

けれども、夫は一私人としての要らぬ遠慮であるかも知れない。人間と云つても無限永却な宇宙の前には一粒の原子に過ぎない事を自覺してゐる天文學者としての立場から、世間が何んと褒めやうと、貶さうと、そんな事は疾の昔に縁を絶つてゐる筈である。事實世間の人々も今日まで然ういふ風に予を考へてゐて呉れた。故に予は一切の非難にも、賞讃にも全然遠方の傍觀者である。

左に掲ぐるのは、一人の狂はん許りの母によつて認められた書信の全文である。それは尠くとも惱んで居る人を救ふ企ての如何に貴い事であるかをよく示してゐる。彼女の治療は最早今日の科學では駄目である。乃ちこれから創造さるべき心靈科學の力に俟たねばならぬ。

我が偉大なフラマリオン様――

私は是非貴方の御膝にお縋りし、貴方のお足に接吻してお願いするところですが、それも叶ひませんから、恠に無分別な振舞の様ですが、突然乍ら手紙を以て御願申上るのです。どうぞ私の心中を御憐察下されまして、恐怖と悲痛から救つて頂きたいのです。

私は寡婦で御座いますが、一人の息子と一人の娘とに慰められて餘生を送つてゐる中に、先頃、たつた一人のこの息子は、三十三年の若い生涯を一期として遂に逝くなりました。この事に

就て是非先生に申上りたいのです。

この子供が五才の時、股關節の疾患を起して色々治療につくしましたが、遂々醫者からも見離されるやうになつたのです。けれども、私共夫婦は子供の病氣を癒してやりたい一心に、マドリット市の相當な地位を棄て、一切の事を犠牲にしてまで、西班牙のある淋しい片田舎に引込みました。その中、子供はとう／＼跛になつて了ひましたが、それでも命だけは幸ひ助かつたので、せめては彼の子の健かに生長するのを楽しみに暮して居りました。

自分から申すも如何ですが、この子供は極めて濃厚な、恰愼な、そして何事にも正直な、寛大な性質で、それで誰れにでも懐つく愛嬌者で、殊に眉目形さへ人優れてゐたので、皆さんから宛然天使のやうな綺麗な子だと稱へられて居りました。子供が私共の前に座つてゐる時、つくづくかの子を顔を見ては何んで恁んな美しい子が私共に授かつたのであらうと思つた事や、又、何うして造物の神様がこの善良な子供にかゝる悩みを與へて下さるのかと勿體ない事ですが神様をお怨み申した事も度々ありました。十二歳の時、足の方の悩みは一寸癒くなつたやうに思はれましたが、それでも松葉杖をたよりに歩いてゐました。十七才の頃には、片つ方の松葉杖と一本の杖だけで歩行けるやうになつたのです。然るに二十才になると、足の病氣の盛り返しと思はれる膀胱

炎に罹りました。そして、これが新たな苦しみの鎖の始まりであつたのです。その後十三年の間は癒くなつたり、悪かつたり、不安の日を送つてゐました。けれども如何に病が募つた時でも、何んなに苦しい場合でも彼の善良な、そして快活な性質に少しも變りはありません。何處までも神々しい位氣高い子供でした。どうぞ私の言葉を噓つて下さるな。私は我が子乍ら彼の性質、氣品、行狀、舉止、動作の人並優れた模様が悉く言ひ表はすことは、逆も私の拙ない筆ではその十分の一も出来ない事と思つてゐる位ですから。

過ぐる四年間は割合に小康を保つてゐたのです。殊に昨年などは自分でも必度癒るに違ひないと信じてゐた位良かつたのです。

私が一九〇二年、夫に先立たれてからは、三人の母子は生活の爲めに働かなければならなくなりました。けれども私共は至極圓滿な家庭をつくつて難有い毎日を楽しく暮して居りました。妹は尊敬して居る兄にその身を献げる爲めに、望まれる結婚を斷つてゐたやうな譯です。私は生きてる限り二人の子供を手許に置く事は、親子三人の此上なき幸福であり、自然である様に考へられました。二人の優しい子供等から朝夕慰められて餘生を送つてゐる私は、如何に幸福な者であつたでせう。御察を願ひます。

昨年の八月、息子は、はや三十三才の立派な青年になりました。或人から鑛山に行つて見てはどうかといふ相談があつたのです。元々この事業に興味を有つてゐたので、私共は餘り進まなかつたが、彼の希望で私共も一緒に參る事になりました。聞けば鑛山迄は是非共馬に乗つて行かなければならないとの事でした。息子は膀胱炎の爲めに豫て醫師から固く乗馬を禁じられてゐたので、そんな危険を冒してまで鑛山などに行く必要はないと、私も娘も反對したのですが、大丈夫危険はないと息子が飽くまで保證するので、仕方なく跟いて行きました。

あゝ、何故私共はあの時、強つて途中から歸らなかつたのでせう。果然息子は疲勞の爲めに胃熱を起して床に就きました。田舎の藪醫者達は本當に彼の病根を發見出来なかつたのです。そして彼等は何れも「何んでもない！ 心配は要らぬ」と言つてる中に數ヶ月は過ぎました。斯かる間に膀胱は段々腫れ上つて來て、とう／＼苦しみの中に破れて了ひました。是時の惨じめな苦痛の有様は、地獄の拷問でも恚んなこととは思はれました。有名な外科醫が來たのは二十二時間も後の事です。息子は既にすつかり世を去る準備をしてゐたのです。醫師は一應の手術をして呉れましたが、「もう駄目だ！ 長くて二十四時間の壽命だ」と言ひ切りました。なんと無情な宣告ではありませんか、それでも健氣な息子は、苦悶の中にも母や妹の悲しみを察して、何ん

なに病魔に抵抗したでせう。それから十三日間も存命して居りました。あゝ彼の優しい魂！偉大な魂！

息子が臨終の言葉は三十三才の若い者の言葉ではありませんでした。それは聖人の教です、天使の諭しです。偉人の戒めです。あゝ、苦しみに至められたあの顔！あの世の何かを視てゐるあの眼！苦痛の中にも微笑を堪へてゐるあの口！

息子は私の手を握りながら申しました。「さやうならお母様、懐かしいお母様、私を忘れて下さいますな。おゝ全能の神様よ、あなた御自身のお子供方にさへ多く與へられないものを、數ならぬ賤しい私にその十倍も恵んで下さいました。感謝致します。この上はどうぞ死を、私を愛して下さるなら、神よ私に死を賜へ！」

フラマリオン様、私を憐んで下さい。あなたのお母様の御心になつてお慈悲を垂して下さい。私は悲しさの餘り氣が狂ひさうで御座います。息子と別れてから、はや三十二日にもなりますが、その間、私は夜も寐々寢た事はありません。着のみ着のまゝ寢床に身を横たへ、唯だ眼を閉ぢてうつら／＼してゐる間に明方の四時になつて床を離れます。この苦痛の眠りの中に、私は必度一度はある極まつた何とも知れない心象が胸に刻まれます。そして眼を開いても明かにそれが

頭の中に残つてゐて、終日そのために悩まされてゐるのです。一日として恐怖を感じてゐない日はないのです。

天文學者であり、思想家であるフラマリオン様！限りない宇宙の不思議や他の世界の事までもよく知つて居られるフラマリオン様！あの神祕の世界に導いて下さるフラマリオン様！私は偉大な貴方の前に跪いて御願申上します。どうぞ魂の残つてゐる所を教へて下さい。私は再び息子に會へないでせうか、何とかして息子と音信を通ずる方法がありますまいか。先生！日夜恐怖に襲はれて居る私をお救ひ下さい。闇の中に彷徨つてゐる私に一緒にの燈明を與へて下さい。若し私が死んで息子に會はれるものなら、今すぐ死にたいのです。ですが先生、娘は一人で此の世に残つてゐるのは厭だと申します。どうぞ一諸に連れて行つて呉れと申されるので、私は今死ぬ事でも出来ません。生きて此の苦しみを續けなければなりません。何んと怖ろしい事でせう。あの世の息子と會へるなら、そして今の恐怖を免れ得るなら、私は何んな犠牲も拂ひます。息子のゐない天國には決して行きたくはありません。

天の秘密を知つてお出でになる大先生！靈魂の在處^{ところ}を握つて居られる大先生！私がこれ程申上たら必ず私の心を、私の身の上を御察し下される事と存じます。先生！今、あれの魂は何

處に居るのでせう。魂は昔の事を記憶して居つて地上に生き残つて居る私共の事を考へてゐるでせうか、生きてゐる時と同じ様に私共を愛してゐて呉れるでせうか。その魂を何とかして私共の近くに呼び寄せる事が出来ないものでせうか、先生！ どうぞ教へて下さい。

お許し下さい！ この狂氣じみた私の仕方を、私は今、夢を見てゐるのか、覺めてゐるのか自分で分りません。唯だ、眞赤に焼けた火箸を傷口に差込まれる様な烈しい痛苦と悲哀を感じて居るのです。

フラマリオン様！ お許し下さいませ、貴方の今、研究して居られる美しい星や太陽には、私のやうな感情や苦痛は有たないでせう。それ等のものに比べると、私の一身などは物の數にも入らない程小さなものです。併し私の今の苦痛は、悲哀は、宇宙の何物よりも大きいと存じます。それは何故でせう。あゝその神秘、その神秘の鍵を私に恵んで下さい。

先生！ 貴方のお母様の御名に依て、もう一度お許し下さい。そして不幸な田舎の女を憐んで下さい。

一九〇七年三月三十日

西班牙、サンタンダー縣、レイノザにて

エヌ、ボツフアード

以上は手紙の全文（冗文の所は處々省略した……譯者）で、一字一句苦惱の文字である。著者が故ら茲にその全文を掲げたのは、かゝる境遇に在る人達の有らゆる恐怖、苦痛を世間の人々に記憶して貰ひたいからである。私は繰返してディオニソスの神々のために辯解して置かなければならない事は、その神々の唯一の意義は、斯様な惱みの雲霧を追拂はんことに悶いて居る人々の大なる悲哀を明かに表はす事にあるのである。

けれども、或る場合に於ては、斯様な悲惨な母性愛にも、絶望の苦悶にも、神に身を捧けて救助を求める熱烈な願にも動かされない、石のやうな冷かな心を持つてゐなければならぬ事がよくあるものである。

僧侶はこの種の訴へを毎日受ける。それは彼等は自分が何んな超自然的な謎にも這入り込んで、それを解決する力を與へられてゐる神の代理者だと考へてゐるからである。彼等は如何なる場合でも型に嵌まつた宗教的慰安を以てこの悲しみに答へるのである。僧侶は常に信仰と啓示とを語る。併し乍ら、信仰はこれを強ふる譯にはいかない。それは又、吾々が考へる様に一般的には行はれてゐない。私自身には信仰はない。けれども僧侶や、僧正や、大僧正は社會的に信仰の必要なものである事を教へて居る。地球上には何百といふ種々な宗教がある。それ等は何れも有益なものであらう。けれども暫

學の見地から無條件に承け入れる事は出来ない。殊に私が今まで通べた様な事件に逢着して、彼等神の代理者達は、全知全能の神が人間を支配してゐるのだと云ふ事を、立派に吾々に得心させる事が出来やうか。科學者は懺悔者の腰掛にも、僧正の椅子にも着くことは許されない。科學者はその識つて居るだけの事を説明するのみである。彼等は凡ゆる物に對して正直である、公平である、獨立的である、又理論的である。科學者の任務は研究に在る。考查に在る、故に天から眞理の啓示を受入れる事は宗教家よりも少ない。これが私の未知の婦人に與へ得る唯一の答である。けれども私は近い中には彼女の息子に再び會ふ事が出来る。又親子の間には必ず靈的交渉が存在してゐると云ふ事を彼女に暗示して置いた。私はオーギスト、コムトや、サン、シモンや、アンファンタンの様に新宗教の高僧であると自任してゐるのでは決してない。けれども未來の普遍的宗教は科學、殊に物理學の知識と關聯した天文學の上に基礎を有つてゐるものと云ふ事は疑ひのない事實であらう。

吾々は何處までも慎重な研究を續けて行かうと思ふ。著者は茲に自分を過賞し、尊敬された人の手紙の全文を載せた事に就ての辯解を反覆する。それは自分に都合の悪い敬語や、文句を妄りに抹消する事は、發信者の悲歎、信頼、希望の幾分でも滅殺する惧があつたからである。

次に掲ぐるのは娘を亡くした母の手紙である。

先生！ 豫て貴方の御著書に依て御高名をお慕ひして居りました。私は先生から全然未知の者で御座いますが、詳しく私の事情を申上たら必ず私の不幸を憐れみ下されて、慰安の道を示して頂ける事を信じて居ります。

去る九月十九日、私は十六歳になつた許りの娘に先立たれました。娘は思慮の緻密な、感情の至極穩かな、そして心根の正しい、何一つ言ひ分のない子で御座いました。それに表情に満ちた彼女の青い瞳、ぱつちりとして黒い睫毛に縁取られた優さしいその眼、美しい眞直な鼻、幾分大きい方でしたが多分に善良性を表はしてゐるその口、そして百合色をした面長な顔、笑ふ度に刻んだやうな小さな唇、艶々した鶯色のあの見事な髪束の微かに波を打たせて長く垂れたあの立派な姿、そして金の泡のやうに處女の額を飾つてゐるあの可愛らしい生え際、總々した髪束に掩はれてゐる貝殻のやうな小さい耳、朝夕接吻してやつたあの耳垂、今は皆、唯だ想ひ出の種となりました。身心共に何一つ缺點のない、純潔なあの娘が、何うして慘酷な手に奪はれて行つたのでせう。娘の死は私からも一切のものを奪ひ去つて了つたのです。

娘は年に似ず考の深い、物の分つた子でした。生前、人生を超越した最も解し難い問題に就ても二人でよく話し合つた事もありました。吾が子ながら娘は私に取つては貴い信友であつたので

す。何物にも替へ難い可愛い吾が子、吾が友は影も形も見られなくなつたのです。

私は娘が迎も助からないと直覺したその時から、何んな所へでも娘と一緒に、彼女の後を趁ふて私も死んで行かうと、ひそかに決心してゐたのです。けれども、娘の死の前夜、私の胸の底に深く秘めて置いたことが必度彼女の心に通じたのだと思ひます。娘は瘦細つた腕を私にさし伸べて、「お母様！ 私が死んでも、お母さんは決して死んではいけませんよ、お母さんは屹度待つてゐらつしやらないで下さい」と申された時には私も愕然（びつぜん）しました。そして次の日、百合の花のやうな白い娘が最後の接吻を私に與へて、永へに眼を閉ぢて了ふまでは、宛で夢を見てゐたやうに茫（ま）つとして何事も纏まつた記憶はなかつたのです。あゝ最後の接吻！ それは娘が命の残りの全部をその中に注ぎ込んだ接吻でした。あゝその瞬間！ その時深く刻まれた痛ましい印象は永遠に私から消え去る事はないでせう。娘の面影は私の眼の前に残つて居ります。私の爲めに生き残つてゐて泣いて下さいと言はれた言葉は、私には一生忘れることの出来ないものになりました。私は今、何物をも呪ふてゐます。自分の生命の百倍も貴い娘を奪つて行つた神様をも恨んでゐます。娘が生さてゐて呉れてこそ私が生き行く事が出来るのです。この上は私は心靈説から慰安を求めたいと存じます。信仰と希望と愛の中に私の住家を求めたいのです。け

れども私にはさうした學問はありません。

私は夫と相談して、彼女の寫眞、巻き毛、遺稿その他殊更ら縁りの物を卓上に集めて、そして私共の切ない念願を込めて、彼女の魂を呼び出さうと努めました。何遍も繰返して行ひました。けれども娘は一度も歸つて來ません。吾が畏敬する先生様！ 私共は何うしても貴方の御助けを願ふより外はありません。娘はまだ生きてゐるのでせうか。もう一度あの愛らしい口から優しい言葉を聴く事が出来ないものでせうか。私は喜んで私の餘命の全部を捧げますから、もう一度娘の靈魂に會はして下さい。

私のこの世での望みの全部は、美しい、愛らしい娘の魂が残つてゐるといふ證據を求めたい一心です。

難有い先生様！ 私は貴方様の御名著を拜讀して、貴方が必ずこの生き残つてゐる憐れな母の御願を聴いて下さる事と信じます。私がこの神秘を知りたいと望むのは決して單なる好奇心からではないのです。實に生命にも替へ難い切なる必要があるからです。茲に私は堪へ切れぬ心願と、全たき信頼を以て先生の御返事をお待ちして居ります。先生の御命令なら私は巴里へでも何處でも参ります。

尊敬する偉大な科擧者様へ謹んで感謝の意を表します。

一八九九年十一月

テイル、スル、パンヌ

アール、ブリモール

予は右の手紙にも少しの變更を加へてない。予は五十年の間には種々な人から、色々の尊稱や敬語を餘る程貰つて居るので、手紙の中に何んな賞讃の辭があらうと、一向無頓着である。

吾々は科擧者として、自己の天職に忠實であらうとすれば、唯だ知つてゐる事だけの説明でなければならぬ。吾々はその尋ねる人に何んな事情があらうと、一時的の慰安を與へる爲めに何人をも欺く權利はない。予はあの憐れな母の要求に對して絶對に確實な解答が出来なかつた。それは既に二十年前の事であつた。その後も予は本問題の研究を繼續した。即ち本書はその解決の材料を提供する目的を以て出されたのである。

予は未知の通信者からの傷ましい告白を文字通りに寫し出した。それは愛兒を喪つた親や、愛人に別れた人々に取つて「正しき神」なる語は現實に對する侮辱であると思はれないといふ事を表はす爲めであつた。吾々は容易にこれ等の人々の不満や反抗を理解する事が出来る。更に予は、一層甚だしい宗教の虚偽的慰安に充たされた書き物や、舊教徒、新教徒、猶太人、唯心論者、自由思想家、

唯物論者、無神論者の種々な手紙を有つてゐる。それ等は何れも世界の組織に於て聰明な原理（即ち神）の存在を否定する目的から、主として吾々自身の周圍に見るところの様々な不正の事實に就て書いたものである。男子は往々懷疑主義によつて、不可避の物として放任する事に依て、そして又、自然は人間の努力に無頓着であると信ずる事に依て勝手に自分自身を慰めてゐるものである。けれども、女子はさうでない。彼等は自分を諦めない。彼等は無を承け入れやうとはしない。彼等は未知のもので、眞の何物か、其の中に存在してゐると感ずる、そしてそれを知らんと努めてゐるのである。

予は常に殆んど一週間と間がなく、この種の手紙を受取つた。

だが、全智とは一體何であらうか。吾々は常に神は人間と同じ考へを有つてゐる。正義の觀念は即ち神の意思に一致して居る。神の思想は人間のそれよりも無限に優つてはゐるが、その性質に於ては同じものであると信ずる傾向がある。けれども、それは全然間違つた考へであらう。即ちその間には何うしても遙かに異つた何物か、なければならぬ。昆虫はそれが蛹になる時に、又、新たに得た翅をひろげる爲めに蛹の外皮を破る時、何の趣味も、喜憂も感じまい。人間の思想も、昆虫のそれと著しく異つてゐると同じ程度に、神の思想と人間のそれとの間には、大なる距離がなければならぬ。吾々

は矢張神秘によつて圍まれて居る。吾々の任務はその神秘を研究するに在る。

非道極まる歐洲大戦役は、生きる權利を持て生れ、そして父母が多大の犠牲を拂つて育て、來た若い人々を無慘に殺した。而かも千五百萬と云ふ驚くべき多數の青年を奪ひ去つた。予はこの戦争の間に百を以て數へる手紙を入手した。それは何れも人間の制度の尙ほ野蠻であり、不正である事を訴へたもの、戦争の慘禍を哀んだもの、爲政者の無暴を罵つたもの、怖しい破壊を許した神を呪つたもの許りであつた。殊に、愛人を失つた爲めに自分の全生涯を破壊されて了つた事を狂はん許りに想へて來たものが多數であつた。

吾々の運命に關する一層怖ろしい問題が、更に吾々の前に起つた。それは實際解決の不可能な問題であらうか。吾々人間の間には、せめて一瞬間なりとも惡から離れ得ないものであらうか。何んといふ淺ましい事であらう。吾々の眞心の要求、理解せんと欲する切なる願ひ、そして吾人の前に横たはる愛人の亡骸に對する悲しみから、人間を救はんとして生れたといふ宗教は、今まで吾人と約束した何等の證據を齎した例しはない。神學上の立派な議論も吾々には何物をも與へてない。吾々には言葉は要らぬ。唯だ、實證された事實を求めてゐるのである。死は有ゆる人の思想を支配する複雑な問題であり、凡ての時代の人に共通する最高の問題である。それは吾々が刻々向つて行く當然の終局であ

る。出生と同様に重要な生存上の一法則であるとされてあつた。けれども、吾々には出生が自然であるやうに、死も亦自然であるとは考へられない。

生の長からん事を欲するのは、如何な時代の人でも、何んな種類の人でも、生れ乍らにして有つてゐる人間共通の性質である。けれども、この個人的熱望の的となつて居る「生命の永續」と云ふ一般的信仰は、不幸にして未だ積極的根據の上には立てられてはゐない。況んや科學の發展とは何の交渉もなかつた。併しこの事は最も説明の價值ある極めて重要な事實である。

此の場合感情を輕視する譯には行かない。けれども、それは零に等しいものである。科學的係數ではない。既に掲げた二通の書信は長い間に予の入手したもの、一部分である事は勿論であるが、一八九九年、予は社會の有らゆる方面に向ひ、自らその事實の調査を開始して以來、予の許に蒐まつたこの研究に關する文書は實に四千百〇六通、それに以前の分五百通を加へなければならぬ。此の事は予の著書ランコニー（譯者曰くアルス刊行拙譯）「未知の世界へ」六十九頁に詳かに載せてある。

前二通の書信に類したものは幾百通とある。併し一々それを茲に紹介してゐては徒らに讀者の煩を増すに過ぎない事であるから、唯だ、一九〇四年八月十五日に、ラ、ロシユルで受取つた少しく内容の異つた一通の手紙を左に紹介する。例に依て原文のままである。

フラマリオン足下——

私は今、兩眼共に白内障で悩んで居ります。けれども、是非私はこの手紙を貴方に書かなければならない事情があるのです。私は何事にも懐疑的な、そして冷評好きな者ですが、併し、事實は飽くまでも信じます。今、私共四人の生命は回復の道のない、無惨な災禍の爲めに破壊されて了ひました。私の娘は一九〇二年頃までは極めて淡泊な、愛嬌者で、娘の友達や、その親達は申すに及ばず、ロシフオア全市の評判者でした。然るにその娘は遂にネーオルの精神病院に一生を送る事になつたのです。憐れな母は娘を連れて、巴里にも、ボルドーにも、ソージャンにも行きました。そして種々の専門醫に診て貰つたのですが、彼等は何れも科學の虚偽と無力とを遠慮なく示して呉れました。この一年半は實に私共親子が唯だ彼等の犠牲になつた苦しみの歲月でした。私はいつその事、自殺したらと思つて居ります。私の腦の中で、「お前の娘は氣狂だ」と繰返してゐます。私は今、世の無情を考へたり、生命は人間多數の爲めに存するものだと思つた虚偽な事を考へたりしてゐます。私共は生れるときから先祖の缺點を持つてゐるのです。癱瘓された肉體の裏に膠着してゐる人格とは一體何んなものでせうか。肉體は分子の作用に因り、兩親の教育に依り、吾々に強ひられた生活様式に依り、又父母の肉體的及び道德的條件に依つて一つの型に打

込まれた鑄型となつて終生その人格を支配するのではないでせうか。換言すれば人格はその鑄型の爲めに一生奴隸となつて驅使されるものではありませんまいか。

毎度、教會の教壇からは随分莫迦氣切つた説教や墮落した話を聽かされてゐます。私は常にそれに反抗して來ました。私は凡ての人に承け入れられる確かな事實を信じてゐたいのです。何でも輕信し易い唯心論者は餘りに愚か過ぎます。彼等は私にビタゴラス、佛陀、アベラール、フェネロンや、ロベスピエールの書物を呉れましたが、それ等は私には極めて非常識な教としか思はれません。寧ろ彼等の言ふ事を眞面目に承入れてゐる人々の心が私には何うしても解し兼ねます。

私は三十三年の間、餘り書物を読んだ事はないのです。唯だ、近頃になつて、自分の今日の煩悶に、聊かでも應へて呉れる物はなからうかと、二、三の書物を捜して見ました。私は偶然そこに貴著「未知の世界へ」を見つけたのです。

私は敬虔な心持を以て「未知の世界へ」を読みました。そして、その百五十七頁のマリー、ドテイロの話、猫は慥かに妖怪を認めたに違ひないと思はれます。それは必度、電氣的の刺激を受けたのでせう。併し先生、貴方は何故恠うした現象を唯だ臨終の人に就てのみお調べになるので

すか。

死に瀕してゐる人の最終の悲嘆、最後の思想は無意識に出る表現の原因であるといふ事には何の證據があるのでせう。

私は貴方の未知の友です。貴方の御高説に共鳴してゐる一人です。貴方の靈魂の研究に關する結果を眞剣に期待して居る者です。靈魂か、媒介物か、貴方は有數な天文學者として、又二に二を加へれば四であつて、五でない事を立派に主張される數學者として、この問題を科學的に何う御證明なさいますか、要は貴方の權威ある御研究の結論を伺ひたいのです。どうぞ私の申上げた事を貴方の前に燃えてゐる香とのみ思つて下さるな。私共の迷ひを解いて下さるのが貴方の偉大なお役目です。何も御遠慮はありません。貴方の御研究の結果を御發表になるのが貴方の當然な權利です。天職です。私共は百萬言の福音よりも、貴方の一言の御教示を渴望してゐるのです。

(一四六五信)

以上の手紙は政府のある大官から寄せられたもので、讀者は文面の模様で暑ほそれと推察され得る事と思ふ。併し遺憾乍らその姓名を公にすることは出来ない。

同時に讀者は、予の研究の結果が相當の權威を具へるまでは、その發表を見合せてゐた譯も諒解さ

れる事と信ずる。實際この手紙を受取つたのは一九〇四年で、當時は予が一八六一年から始めてゐた著述の最中であつた。斯の種の著作は、一年や二年の短日月の間に纏められるものではない。

實際、予の許に集まつた幾千の照會、質疑に對して予の取扱つて來た始末を一々本書に紹介してゐては、一卷は愚か、十二巻でも完結する事は出来ない。それは凡て解明される時が来るであらうか。中には二十五年も前からの問題であつて、暑ほ解決に近づいてゐるものもある。

多數の讀者は長い間に亘つて、種々の事實や觀察から私の研究に向つてその解決の資料を寄せて呉れた。そして其の解決こそ彼等が非常な信頼の下に期待してゐるものである。吾々の努力が、果してこの死の問題を縊つてゐる長い間の暗雲に一閃の光明を投げ與へる事が出来るであらうか。

子供の時分、學校で哲學や、宗教の話の中に「唯一つの事が必要である」と云ふ事を屢々聽かされた。それは魂を救ふことである。先生は常に吾々にアレクサンダーや、シーザーや、ナポレオンの戰爭の話をした後で、必度、「假令、人が全世界を獲たとしても、自分の心靈を喪つては何んにもならぬ」と結んだものである。そして先生は地獄に墮ちた罪の人々が、永劫不滅の火焰で惡魔に拷問されてゐる所の繪を吾々に示して、この火は罪の人を燒盡す事なく、永く彼等を燒き苦しめてゐるのであると教へて吾々を戰慄させた。事は何うでも鳥渡、面白い趣向である。兎に角、死後の運命に關する

問題は吾々に最も重大な、最も真面目な、そして最も深刻な問題である事は争はれない事實であらう。生きようか。生くまいか。ハムレットのこの場面は毎日吾等の前に繰返される。深く考ふる人の生涯は死に關する默想である。

若し人間の存在が結局無に歸るものならば、吾々の全生涯は單なる一場の喜劇に過ぎない。

だが、吾々が進んで死の問題に直面するにしても、退いてその考へを避けるにしても、兎に角、死は生命の最大事件である。吾々の前途に必ず横はつてゐる絶壁で、いつかは其の下に落ちる事の絶對に兎れ得ない終點である。故らにその問題を忌避するが如きは稚氣の極である。殊に、この問題は絶對に人智の推察を容さない神秘であると諦め、吾々の研究を以て徒らに時間を浪費する物好きな所業と嗤ふものがあるとすれば、それこそ人生を解せぬ痴者の言ひ分であらう。自己さへ分らぬ憶病者の申譯であらう。

死の悲しい光景を描き出してゐるものは、主としてその周圍を取巻いてゐる種々の事物や、喪葬や、それを包む宗教的儀式や、最後の審判日や、そして最終の告別哀叫である。若し吾々が天文学や、心理學の研究に傾注すると同じ努力を、吾が地上生活の最後の局面に向けて、その刹那の現象を調べて見たら、後に残された人々の絶望が轉じて未來に輝く希望となるやうな結果を見る事はあるまいか。

暴風雨の後に靜かに虹が現はれるやうに、臨終の悲嘆が讚美にかはる様になりはしまいか。

吾々が自分の運命を考へる時、或は自分の愛人を喪つた時、自づからこの怖ろしい問題に對して解答を求める。吾々は果して再會の可能性を有つてゐるのか、別離は絶對に永久的なものかといふ疑問を、何うしても考へずには居られない。天帝即ち神てふものが現實に存在してゐるのであるか、自然が吾が心に與へた純潔な感情を無視して、不正や、罪惡が尙ほ人間の生涯を支配するものであるか。一體、この自然とは何であらうか。自然なるものに意思があらうか、目的があらうか。無限に小さい吾々の心の中に、大宇宙のそれよりも大きい智識、正義、至善、靈感があり得るのであらうか。この謎に關聯してそこに極めて多くの問題が存在してゐる。

吾々は結局死ぬのである。恁んな確かな豫言はない。この地球がもう百回太陽の周圍を廻つたなら、吾々の親愛な諸君は一人もこの世に残つて居ないのである。

自分と自分の愛する人々の爲めに、吾々は何故に死を恐れなければならないのか。

「死の恐怖」とは愚かな言ひ分である。吾々は全く死んで了ふか、それとも墓場の彼方で生きて居るのか、いづれか一方が眞實である。若し全く死んで了ふのなら、死について何事も知る筈はない、感ずる道理はない。若し生き續けて行けるといふのなら、そこに始めて問題が生くる。研究の價值が認

められる譯である。

何時かは吾々の肉體の生命が絶える。そこに些の疑ひがない。その時肉體は幾百萬の分子に分解するであらう。そして、それ等の分子は他の植物、動物、人間などの組織に再び結合されるであらう。肉體の復活といふ事は最早今日では何人も信じ得ない教義である。吾々の思想、靈魂の本體が、物質的組織の壊滅した後も尙ほ残存するものならば、生命が永く續く事になるから眞とに喜ばしい事である。若しさうであるとすれば、吾々の意識的生活はこの世に於けるよりも更に優れた他の様式で繼續するであらう。何故かといふと、地球は吾々が直接研究の出来る唯一の惑星であつて、進化は地球の全歴史を通じて明かに示してゐる自然の法則である。故に、この意識的生活こそより以上に優れた至上の生活に相違ないからである。

この問題に關しマークス、アウレリウスは、「死とは何であるか。若し死を圖んでゐる多くの心象を去つて、死そのものだけを考へるならば、死とは唯だ、自然の經過である。自然の經過に涙を潑ぐ人は子供である」と述べてゐる。

フランシス、ベーコンも、「死の儀式は死そのものよりも遙かに恐ろしいものである」と言つて同じ様な考へを表はして居る。

又賢明な羅馬皇帝は、「眞の哲學は平靜な心を以て死を待ち、その来るや今まで構成してゐた諸要素の分解するのを見るだけである。これは自然の成行であつて、自然に従ふ事は決して忌避すべき事ではない」と書いてゐる。

けれども、エピクテツスや、マークス、アウレリウスや、アラビア人のストア哲學も、回々教徒も、佛教徒も、吾々の知らんと欲する問題に何等満足な明答を與へないのである。

自然が悪であるか、善であるかは素自から別問題である。

考への深い人は、自分を省みる時、「自分は一體何うなるのか、全く死滅して了ふのであらうか」と云ふ疑問を懷いて必ずその解決に苦しむ。

併し、恚うした考へは、兎角思想の定まらぬ人々の中に經驗さるゝ幼稚な空想であると認められて居つた。それは何等の理由なしに一概にさう決められてゐたのであつた。けれども、吾々には何うしてもさうは見えぬ。吾々はその所謂幼稚な空想の中にも確かに重大なある事實を認める。死滅して了ふと考へる事は悲しい。吾々は神の一部分である。萬有の中に尙ほ重要な位置を占めてゐると考へる。だが、天文學上の見地から言ふと吾々は問題にならぬ程微々たる價值のないものである。人間全體としてもさうである。吾々は今日に於ては、最早パスカル時代のやうな事は言へない。地球中心説

も、人類中心主義も、何等価値のないものになった。原子は相續いて失はれ、無限に失はれてゆく。けれども、兎に角、吾々は現實に存在し、考へるのである。そして人間が考へることを始めて以來、引續いて同じ問題を考へて來た。その問題を解決せんとして種々の宗教が起つたのであるが、一つとして成功した宗教はない。

古い時代からの神秘は段々に變つて來た。そして、カルデア人、エジプト人、ギリシヤ人、ローマ人の時代から、中世紀の基督教徒の間に行はれた様な恐ろしい神律法が今尙ほ残つてゐるが、人に似た神や、人喰神は大概姿を隠して了つた。彼等の宗教も無くなつた。けれども、宗教上の大問題は依然として残つてゐる。それは靈魂不滅の條件の研究である。吾人は死と同時に消えて了ふのか、それとも引續いて存在してゐるのか。

フランス、ベーコンは、ローゼル、ベーコンの様な天才ではないが、極めてポピュラーな有名な學者である。彼は「苟も人間の學問の領域に於ては觀察、經驗及び事實の決定的勝利は、學理に基く科學的實驗の基礎の上に正しく確立さるべきものである」と豫言したのである。彼は斯かる立派な説を持つてゐたに拘らず、唯だ神の事、超自然の事になると、何もかも絶對不可侵の領域としてこれを宗教的權威と信仰の手に委ねて了つたのは彼としては餘りに卑屈の態度であつた。今日ですら相當數

養のある人々の中にも斯の種の考へを固執する者がある。何事でも實驗に提供し得ないといふ理由はない。吾々は學んだ事以外には何んな事も知らない。若し神がそれ等の問題を自己の領分内の事と自負するのが誤つた伴り事だとすれば、科學も亦その諸問題を何の價值なきものであり、神秘なものであると決めて、何等研究の態度に出る事をしないと云ふのも同じく誤つた考へである。

事實、靈魂不滅の問題は未だ積極的に解決されてない許りでなく、屢々虚偽の手段に利用された位で、消極的にも解答を與へられてないのである。

吾々は兎もすれば、死んだ後のスフィンクスの謎は神秘的な事であつて、人間の心は到底この領域に突入る能力はないのだと信じて了ふ傾向があつた。然もこの問題は吾々の生活と最も密接の關係を有つてゐる事である。吾々は何うしても自分の運命に極めて深刻な興味を有する。

研究の力は偉大なものである。死の神秘は從來の考へよりも、やゝ明瞭になつて來た。吾々の更に進むべき光明が前途に見えて來た。五十年前には少しも知られてなかつた或る實驗に依て、吾々の心眼に判然と映つて來た。

天文學上の研究と靈魂の研究とが互に聯絡してゐると云ふ事は何も不可思議な事ではない。物理學的世界と精神的世界とは一つである。天文學は常に宗教に關係して居つた。昔の科學が不確實な外

象に基礎を置いたのは間違つてゐた。誤つた昔の信念はそれから生れた結果であつて、神學上の天は即ち天文學上の天である。神の罰は直ちに天から受くるものだと思つてゐたのである。精純な學者の義務は、忠實に眞理を探究する上に存する。

議論の自由な時代には、科學の研究は完全に獨立して、公平に、そして慎重にある問題を取扱ふ事が出来るが、宗教裁判の行はれたかの頑迷な時代に在つては、自由思想を研究した學者は悉く斷頭臺に上げられた。何千と云ふ人々はその思想の爲めに生きながら焚刑に處せられた。羅馬ですらジョルダノ、ブルノーの像は當年の殘虐を偲ばせる。そして又、フローレンスのサボナローや、巴里のエチエンス、ドレーの事を考へると吾人は今尙宗教の頑迷に恐怖と戰慄とを禁じ得ないのである。斯くしてヴァニニもツウルーズで燒殺された、ミケル、セルヴェッスもジュネバでカルヴンの爲めに火炙りにされた。

それは一面から觀ると吾々全體が無智であつたのである。事實、有ゆる研究者は箝口されてゐたので、心靈科學の如き實際生活と離るべからざる研究さへ出来なかつた。人々は地球上に住んでゐ乍ら、自分の存在してゐる所も又その意義も知らず、又、不思議に考へる人もなかつた。彼等は唯だ、飲んで、喰つて、眠て繁殖する鳥獸と擇ぶ所がなかつた。彼等の覺むるのはたゞ金錢だけであつた。

予は今日まで、人類の總ての階級、凡ての國々に向つて天文學の基礎的知識の普及に努めて來た。そして彼等の中に自分の棲んで居る世界を理解することに興味を有つてゐる人が何の位居るか、又宇宙萬物創造の事實に關して何れ位の基礎的觀念を有つてゐるかといふ事を調べて見た。その結果、地球上に住む十六億の人の中、約百萬の人が斯の種の興味を有つてゐる事、即ち天文學的の書物を好んで讀む人である事を確めた。そして特に科學に親しみ、常にこの種の新刊書を読んで世界の新發見に注意を拂つてゐる人が約五萬を算する。その中六千人は佛蘭西人である。

そこで、自己の住んで居るこの世界を漠然と知つてゐる人が千六百人に一人、本當に理解してゐる人が十六萬人に一人の割合になる。

今日、宗教學校でも、普通の學校でも、小學校から大學までの天文學上の教育は、殆んど顧みられないと言つてもよい。實證心靈學もさうである。世界人類の一般的無智は猿から生れた時代からの傳統的法則である。

要するに、人類は地球上に於ける悲惨な生活條件、衣食住、それに伴ふ物質的生存條件の過重な負擔に捉へられて、哲學に興味を感じる邊がなかつたといふ事は何等辨解の餘地はない。けれども、又、一方から觀ると、斯様な状態は人々が好んで自らつくつたのである。多くの男女が無益な娛樂に

耽つたり、滿らぬ新聞や、小説を讀んだり、歌留多に日を暮したり、他人の事に要らぬ世話を焼いたり、聖書の譬ひにある様に、己が眼の^{まぶさ}を知らないで人の眼の塵を苦にする所謂身の程知らずな眞似をして見たり、物好きに政治に手を出したり、教會や劇場を遊び廻つたり、贅澤品屋に詰めきつたり。洋服屋や帽子屋を困らせたりすることの出来る無要の時間を有つてゐるからである。

一般的無智は所謂利己主義と云ふ悲惨な個人主義の結果である。靈的生活の必要は殆んど何人にも感ぜられてなかつた。偶まそんな事を考へる人があればそれは寧ろ例外とされて來た。若しこの靈的生活の研究が夙に吾々の興味を惹き、地球上に於ける吾人の意義を教へて居たならば、人は進んでこの研究に没頭してゐたであらう。實際吾々の人間としての生活は極めて曖昧なものと思はれる。

地球上の人々は尙ほ無智である。未だに獸的である。現在ですら權勢が正義となつたり、武力が正義を支へたりしてゐる。各國の政治家の主腦は陸軍大臣で、國帑の十分の九は時々行はれる國際的屠殺に使はれる。それは皆國民が奉納するのである。

而も死は尙ほ人間の運命を支配する。

死は實際の王者である。その王權が先年のやうな兇惡野蠻な暴威を振つた事は史上嘗て例を見ない。死は幾百萬の生命を戰場に奪つた。死の王者は如何にして斯かる多數の運命を死に導いたのか。吾人

の研究せんとするのはこの最後の死に就てゐる。これは吾々の最も注意に値する大問題である。

本書の目的は「生命永續の明確な證據を得る」に在る。従て文學的論文でも、詩句でも、又人を蕩心せしむるやうな學說でも假說でもない。唯だ、觀察に依る事實と、その論理的演繹から生れた結果である。

吾々は全然死滅して了ふのであるか、それは疑問である。然らば死後に残る何物かあるのか。人は子孫が續く、事業が永久に遺る。それが即ち靈魂不滅だなど、途方もない事を言つたり、さう信じてゐる人もあるが、そんな事は單なる冗談に過ぎない。若し吾々が全然死滅して了ふのなら、吾々の折角努力して來た事業は何んにもならない結果になる。そして地球も終りに近づき、人類も總て絶滅して了ふ。斯くして有らぬものは破壊されて了ふ事になる。

靈魂は肉體よりも更に生殘るか何うかを知る爲めには、先づ肉體的組織から獨立して、靈魂それ自身の存在を確めなければならぬ。そして、明確な觀察による科學的基礎の上にそれを立証しなければならぬ。今日まですべての時代の神學者達が麗はしい語句や、實體學上の議論でお茶を濁して來た様な事柄は吾人に取つては一顧の價值もない。そして、最初に誤つて一般に承入れられて、それが習慣的に、又傳統的に教へられて來た生理學上の學說の不完全であつた事も深く考慮しなければならない。

第二章 唯物論——不合理な學說

吾々は外觀に誑かされてはならぬ

(コペルニクス)

オーギスト、コムトの實證哲學と、その宇宙から天文學、生物學と移つて行く彼の正しい分類法は誰でも知つて居る。又、コムトの後繼者リットレーの事も知つて居る。彼の辭書は大概の圖書館に備付けられてある。彼の著書は到る所に行き涉つて居る。予は又、直接に彼の人格を知つて居る。彼は卓越した學者である。優秀な百科辭典である。そして奥行のある思索家である。そして彼は立派な唯物論者で、無神論者である。けれども、彼の容貌は彼の心の美しさと正に反比例してゐる。彼の顔を見ては誰でも人間の祖先が猿だと首肯せざるを得ない。彼は稀に見る高尚な、そして寛裕な心の持主であるが、彼の夫人も亦極めて敬虔な信仰家であつた。彼は日曜毎にサンシユルピスへ彌撒に

行く夫人を送つて行くが、それは彼の善良なそして親切な心からで、自身は決して教會の中には這入らなかつた。彼の後繼者である同じく無神論者であり、唯物論者であつたル、ダンテクも、リットレーに劣らぬ立派なそして善良な人であつたが、教會の儀式を以て葬られた。それは彼にとつては實に氣の毒な事であるが、信心家である彼の夫人を苦しめない爲めであつたといふ。理屈は抜きにして、そこに夫婦のこまやかな溫情が見られる。婦人はよろしく生涯の伴侶として斯様な夫を擇ぶべきである。彼の「牧師の反對者」であつたジュール、スーリーも同様に牧師等の禮拜式の下に葬られた。この世には眞の論理はない。主義は必ずしもその行爲を支配するものではない。舊教徒であると自稱する者が大の虚言者であつたり、掠奪者であつたりする。唯物論者で極めて品性の高潔な人もある。予は又、偉い學者であつたエルネスト、ルナンは彼の誠實な心からすべての偽善から免れる爲めに、彼が神學研究の結果贏ち得た僧職を抛つた事もよく知つて居る。

これ等の優れた人々の誠實な意見は最も吾人の尊敬に値するのであるが、殊に彼等は他人の意見に傾聴したその宏量に對しても吾人は大に敬意を表さなければならぬ。併し、彼等の意見には吾人の何うしても首肯し得ないものもある。彼等とても何處までもそれを固執してゐるのではない。

予は茲に、リットレーの著書「哲學の見地より觀た科學」に就て少しく研究して見やうと思ふ。吾

人は彼の此の著書を以て、その競争者であるテーヌの説と同様に近代の唯物論的主張の基礎として採る。唯だ、その説に直面することを恐れてはならない。牛の角を捕へることを怖れてはならぬ。

リットレーの著書中、心靈生理學の章に次のやうな事が書いてある。

「既に心靈生理學なる語からして恐らく奇異の感を與へる事と思ふ。それは智的及び道德的能力の研究を意味する普通の心理學と云ふ言葉を用ひた方が可かつたのかも知れない。併し、自分は今まで、心靈生理學と云ふ名稱を何回となく使つて來た。又、それが一般に廣く使用されてゐるので、最早、殊更ら疑義を起す様な曖昧な文字でもなからうと思ふから、引續き此の儘使用して行く考へである。

この語の語源をいふ語は、寧ろ形而上學や、神學に適合した言葉であることは事實である。併し乍ら、心靈といふ言葉に「智的及び道德的能力の總體」といふ意味を持たせると、心靈生理學といふ事も言へる譯である。尤も恁んな長い複雑した文句は大抵の場合、適當な簡単な言葉に代へる方が可いのである。

それは然うと、一體心理學なる語は、その用ひ始めた時からして然うではあるが、現在でも神經といふ物質から全く離して考へられた心の學問を意味してゐるのであるから、予はある學問だ

けに特殊な言ひ方を以て、實驗科學の本旨に叛く様な言ひ表し方の言葉を用ひたくはないのである。そして又、用ふべきではないと思ふ。實證的な科學では、人は如何なる性質でも物質に依らないで認識することは出来ない。それは先驗的に獨立した靈的實體などがないといふ先入觀がある爲めではない。寧ろ後驗的に、物質に重さがあつて重力が表はれる、暖かい物體を離れて熱がない。結合せられ得る物質なしに化學的親和力がない。生きた感情と考へるものゝ存在しない限り生命がない、感情がない、思想がないといふ理由からである。

本書に生理學と題した事に就て、一寸辯解して置くが、予は初め腦生理學と名づけやうかとも思つて見た。けれども、この題目では予が本書に期した事柄より以上の事に涉るのを惧れたからである。即ち予が本書に取扱はない働きにも腦は皆作用してゐるのである。予は茲には腦の働きの中で、「外界及び予自身に就ての觀念に影響する多くの印象を生ずる」ものゝ範圍に限つて研究したいと思ふのである。

予が心靈生理學といふ名稱を選んだのは、心理的な語は「感情と觀念に關する」といふ意味であつて、生理學は即ち頭腦の構造と機能に關係せる感情と觀念との構成と結合の意である。これは敢て科學に新名稱を用ひ様とする銜氣に出たのではない。一は予の著書の題目に明瞭な輪廓

を與へん爲めと、一は讀者達に向て、心靈現象とその連絡及び關係の工合に就ての記述は純粹の心理學に屬する問題で、本書の目的は「ある働きとその結果の研究」に在ると云ふ事を銘記して貰ひたい爲めである。心理學が生得觀念說、殊にロック派心理學を避ける程、益々生理學に接近して來るのである。生理學が自己の範疇を驗べて見たら、假令心理學が高尙な思索に耽る者は俺等の仲間から破門するぞと威嚇したところで仕方がないのである。今日では智的及び道德的現象は神經組織の現象である事、又、人類は何等明瞭に區劃された境目なしに、最小の動物まで擴がつてゐる連環である云ふ事實には、もはや疑ふ餘地がない。そして、如何なる名の下にそれが働かうとも、叙述、觀察、及び實驗で行く限りは吾々は生理學者である。予は生理學といふも感情や、觀念に關する限り如何なる立派な説も重要な要素として承け入れないと云ふ様な偏狹な生理學を認め得ないのである」と

以上は唯物論的心靈哲學の基礎である。

私は讀者に向て、この論旨を充分に考量されん事を望む。そこで、重さを有する物質なしには重力がない。暖い物體なければ熱がない帶電體あつて始めて電氣が通ずる、結合せられ得る物質なしには化學的親和力が表はれない。そして考へるものの存在しなければ、生命、感情、思想を見出されない。

この論法で行くと、吾々は心靈の存在を承認しなくても可いかも知れない。

然し、この種の論法は「性質」なる語の用ひ方に依るのであつて、同時に次の様な疑問が起る。

思想を以て重力や、熱や、物體の機械的、物理的、及び化學的の親和力に較べる事は、正に相反した二つの物を對照する事であつて、それは心と物との比較である。

人間の意思は子供の時分でさへ人格的である、意識的である。然るに重さ、熱、光、電氣は人格を有たぬ。意識を有たぬ。それは不可避的な、盲目的な、そして自然的な物質的條件の結果である。兩者は恰も晝と夜との違ひである。

科學的の推理自らが屢々根本的な誤りを惹起することがある。例へば熱は必ずしも暖き物體から生ずるのではない。溫度を有つてない運動が熱を作り出す事が出来る。熱は運動で出來たものである。光も亦運動の結果である。電氣の性質は未だ分らない。といふのである。

予は實驗派の首腦にして有名なリットレーが何故に斯かる推理で満足してゐたかを疑ふ。これが單に言葉の遊戲であつて、何等疑問にも何にもならない説であるといふ事に氣が付かなかつたとは、何うしても理解が出来ない。要するに斯様な説に「性質」なる語を弄んだものである。吾々が最初に實證的に證明しなければならない事は思想は神經體の所有に係るもので、原理としては矛盾する様に思

はれるが「無意識が意識を創造する」といふ事である。

吾々は木片と、大理石や、金属の破片を比較する様な事はしない。けれども、精神、思想、自由についての情操、善、意思等と、有機的の機能とを精密に對照して見る。テークは肝臓が胆汁を分泌する様に、頭腦から思想を作り出すのであると言つた。併し、これは彼の如き理智の人にして尙議論の方向を、先づ豫め自分で決定して、而も夫れを彼の神學者達に劣らぬ盲目さを以て頭からさう決めて掛つた議論ではあるまいか。そして、先入觀念、又は體系的確信に陥つた非科學的な考へ方ではないか。

吾人は研究の著手に當つて、始めから言葉に容易く満足しない様にする事が大切である。一體、物質とは何であるか。一般の考に依ると、それは感覺に依て認識し得る物、見る事、觸れる事、秤る事を得る物である。けれども、人間の中には見る事も、觸れる事もそして秤ることも全然出来ないものがある。人間には物質的の感覺から全く獨立した要素、即ち、考へる、欲する、動く、そして眼なくして物を見、耳なくして聴き、未來を豫想し、未知の事を知覺し、遠隔の地に於ても現はれる人格的、神靈的の原質がある。この眼に見えない、秤る事の出来ない不可解の靈的要素を以て、直ちに腦の本質的作用であると考へるのは何等證明のない空虚な宣言である。それは鹽から砂糖が出來るとか、魚

が地上にも棲む事が出來ると考へると同様に自己撞着した論法である。吾々は茲に、實際の觀察、即ち實驗した事實の觀察に依つて、人間が種々の本質的能力を有つてゐるばかりでなく、動物の有機體と異つた能力を有つてゐる靈的物體である事を立證しやうと思ふ。そして又、この事實の觀察から、リットレー、ル、ダンテ其他知名の唯物主義派の學者達の用ひた同一方法に依て、本筋から離れた奇怪な口先き許りの議論を排斥せんとするのである。

コムト、リットレー、ベルテロー等の卓越した思索家ですら、眞實は實際不完全な、そして狭い吾々の感覺の範圍内にのみ限られてゐるものである事を、果して想像し得たであらうか。恐らく魚は水の外には何物も無いと信じてゐる事であらう。犬は人の様に視力によらないで嗅覺に依て、感覺印象の分類をする。殊に傳書鳩はその方向を知る感覺が鋭敏である。蟻は觸角に依て外部との接觸を感知するのである。

精神は肉體を支配する。原子が支配するのではない。支配されるのである。この理論は全宇宙——空間に在つて互に引力に依て影響を受けてゐる諸々の世界から、動物植物に至るまで適用される。木の葉は造られるのである。卵は生み出されて後に孵化するのである。この作る事はその性質に於て既に智的である。

普遍的精神は凡ゆるものに在る。それは全世界に充滿してゐる。この精神は腦の介在を必要としてゐない。眼と視力との間の、并に耳と聽力との間の機械的關係は視官と聽官が智的に構造されてあるものと推定しなければ、それを解剖する事は全然出来ない。この結論は植物、動物及び人間の受胎作用の解剖から更に一層明確に立證されるのである。これを人間の場合に見ると、先づ卵子が受精する。それが段々に發育する。そして母の胎盤に依て胎兒が育つて行く、母は妊娠より有機的變化を起して乳が出るやうになる。それから子供が生れる。生れた子は養育されて漸次肉體的にも、心理的にも發達して来る。かくして一箇の人間になるのである、この發達の順序はあらゆる物を組織する順序である。廣大無邊の宇宙に存在する恒星や、惑星の組織も、要するにこの微小分子の組織と同じ法則の下に支配されてゐるのであつて、そこに智的支配力の存在は拒む可らざる事實である事を示すのである。併も、精神は腦から來るのではない。若し神が人間を神の姿に造つたものなら、人間は既に禮を返した譯である。若し金龜子こがねこが自分を創造者の姿であると想像したならば、彼等は自分を最も偉いものに思つてゐるに相違ない。事實、ヘブライ人や、基督教徒や、回教徒や、佛教徒の想像した人間に似た神は存在してはないのだ。父なる神とか、エホバとか、ジュビターとかは唯だ象徴的の言葉に過ぎないのである。

人の發生が生理學上の見地から立派に組織立てゐるとしても、神たる母性の見地から觀ると甚だ不完全なものである。何故に子の爲めに獨り母のみに澤山の苦しみがあるのか、何故にあの様な恐ろしい最後の苦痛を與へるのか。教會ではそれ等はイザの罪の罰だと教へてゐる。何んといふ莫迦氣た事であらう。アダムとイヴは嘗て本當に在つた人か、女の動物は凡べてこの苦しみを有つてゐるではないか。自然は女の妊娠中の苦しみや、分娩の殘酷な苦しみに対して毫も顧着しない。それは疑もなく感受性の缺陷である。神は決して生物に対して優しくも慈悲深くもないものだ。産婆の方がまだ親切である。吾々は何うしても神を理解する事は出来ない。澤山の證據は悉くそれを示して居る。そして又、吾々の精神のまだ下劣な事を證明してゐる。

精神、智、心的要求等はすべての物にある事は否定出来ない。實驗科學は全宇宙の現象が結局物質と運動の二元論、若くは物質とその性質の一元論に歸する時に行き詰つて了ふ。然るに博物學、植物學、動物生理學、人類學の場合に於ては、物質とその運動以外に、それ等と遙かに異なつた一要素が認められる。それは生命である。生理學者クロード、ベルナードは生命は物質分子の產物ではないと吾々に教へてゐるではないか。更に又、宇宙は自づから力本説を吾々に啓示して居る。即ち原子それ自身が運動を具へてゐるからである。この原動力はあらゆる物質や、人間を組織してゐるので、物質

界にのみ限られてゐるのではない。

『五六年前、予はセンナンに住むヘンリー、フエーバーといふ自然科学者を知つた。彼は最も人格の高い、忠實な學者で、久しい間自から昆虫の生命に就て研究し、極めて不思議な事實を發見したのである。彼の著者「昆虫學の思ひ出」は十卷から成つてゐるもので、殊に彼の死後に於て廣く讀まれた本であるが、それに依ると、昆虫にも微生物にも皆その性質の中に魂を有つてゐるといふのである。例へばスヘツクスと云ふ膜翅類の昆虫の一種に砂地に數箇の穴を掘る。そして殺さずに單に癢痒させたる生物をその穴に貯へる。然る後、一つ一つの穴に卵を生む。そこで、犠牲になつた生物は、生きたまゝ、幼虫に食はれてゐる間、ちつとして動けない様にして置かれる。幼虫に取りては新鮮な餌である。子の育つ方法は母虫が悉く豫知して居る。けれども母虫自身ではその事に就ては何にも理解してゐないので、つまり、彼等は凡べて豫知的本能を多分に有つてゐるのである」と。

心理學者ベルグソンは思想を腦の働きとする學說や、又は腦の働きと思想とは並行した等しいものであると見てゐる學說は妥當ではないと言つた。吾々も亦ベルグソンに共鳴する。この學說を唱へる者は、記憶はある種の解剖學的要素に印象されて、それが有る形となつて腦に蓄積されて居るので、忘れると云ふのは記憶が刻まれて居つた解剖學的要素に損傷を生ずるか又破壊された結果である。そし

て此等の外的對象から作られた印象は感光した乾板又はフィルムの様になつて腦に存在してゐるのだと云ふのである。併しこれは極めて皮相的な比喩である。何故かといふと、若しある對象の視像がその對象に依て腦に刻まれた印象であるとすれば、そこに何千何萬と云ふ視像がある譯である。即ち最も簡単な、そして不動な對象でもそれを認識する位置に依て、その形狀、その容積、その色彩等を異にするからである。自身が見てゐる間に絶對の不變性を留保された場合、又は自己の眼が少くともその軌道から絶對に逸れずにゐるのでなければ、紛らす事の出来ない無數の像が後から後からと續いて自己の網膜に映じて、腦に傳達されるのである。常に人相がよく變り、身體がよく動き、そして衣服や、周囲の模様が會ふ毎によく異なる様な人の視像は如何なる印象を腦に傳達するであらうか。併し、吾々の最初の意識は尙ほ唯一獨特の像、殆んど唯一の像を留保してゐる事は否定出来ない。そして此の物體又は人の不變な像は取りも直さず單なる機械的記述の他にこれとは全く違つた事が起つたことを裏書してゐるのである。聽官の記憶の場合も亦、これと同一であると云ひ得る。異つた人に依て話された同じ言葉、又は同じ人に依て異つた時、違つた文章で述べられた同じ言葉は正確に同一音像を與へる事はない。記憶と寫眞とは全然比較にはならない。單にこの考へからしても言葉の記憶の薄くなるのは、腦の表面に解剖學的に記録された記憶自身の損傷又は破壊に歸する學說に充分の疑義が存

する。

更にベルグソンの著書によつて病氣中に起る現象をも研究して見やう。

『腦に著しい異狀があつて、言葉の記憶が甚しく損ぜられてある時でも、濃い情緒のやうな多少深みのある刺激に依て、嘗て失はれてゐた記憶を呼び戻す事が屢々ある。若し記憶が腦中に宿つてゐるもので、その腦が損ぜられ、又は破壊されたとしたら果して記憶を呼び戻すことが出来るであらうか。斯様な事實が屢々起ることから見ても、腦は唯だ記憶を呼び戻す役をするだけで、記憶を貯へる所ではないやうに思はる。失語症の患者は自己の意思を表はさんとする言葉を忘れてゐる。彼はその言葉の周りをぐる／＼廻つてゐるのであつて、その欲する言葉を指すに必要なある力が缺けてゐる様に見える。實際、心理學の方では此の力の外的記號を精密に表はされてある。けれども此の場合に於ても記憶は依然存在してゐる様に思はれる。それは失はれたと思はれる言葉と同じ意義の他の多くの言葉を代用すると、その患者はその中の欲した言葉にうまく滑り込む事が出来るからである。

次に、漸進性失語症、即ち段々に言葉を思ひ出す事が困難になつて行く場合に就て考察して見る。この場合には恰も病氣其の物に文法がある様に、言葉が概して規則正しい順序で消えて行く

のである。最初に固有名詞を忘れる、次に普通名詞、形容詞と消え去り、最後に動詞さへ忘れて了ふ。それは段層を成してゐる言葉を、疾病が順々に崩して行くもの、様に思はれる。併し、この病氣は種々の原因から起り、様々の形を取つて腦の冒された部分のある點に現はれ、そして方向に關係なく進むのである。それでも、色々の記憶の消失する順序は同じである。若し假りに病氣が直接に記憶を犯してゐるものとすれば、右の様な現象が果して生じ得るであらうか。

然らば記憶が腦に蓄積されて居るのでないとする、それは一體何處に貯へられてゐるのか、これに就ては肉體以外の他の物の事を取扱ふ場合に素自らこの「何處」の問題に論及するであらうが、寫眞の乾板は箱の中に貯へられ、蓄音機のレコードはラックの中に藏つて置かれる。けれども、眼に見えない漠然とした記憶といふものにも矢張容器が要るのか、何うして夫れがなければならぬのか、記憶は心以外の何處かに存在するのか。けれども人間の精神とは意識それ自身に外ならない。そして意識は先づ第一に記憶を意味する」と。

吾々は茲に、卓越した思索家と共に、すべての事物は、肉體が單に精神に依て使役されてゐると思ふ様に働くものであると云ひ得る。この場合、吾々は肉體と精神とは絶対に離る可らざるもの、同一なものであると想像し得る理由は更にないのである。

働く脳と、感じる、考へる、希望する意識とは別々に存在する。若し脳の働きが意識の全體に相當してゐるものならば、そして又、脳と精神とが等値のものであるならば、意識は脳と運命を共にして、死と共にすべての働きは終つて了まふ筈である。尠くとも經驗はこれに反對し得る何等有力な證據を示してゐない。況して吾々の死後尙ほ存する事を主張する哲學すらも、形而上學の極めて薄弱な基礎の上にこの重大な題目を並べ立て、却て自らその價値を貶してゐるのである。けれども、若し精神生活が肉體的生活を超越してゐるものならば、そして又脳が意識内に起つたものゝ幾小部分を運動に形を變へるだけであるとすればそこに死後の生活は最も可能性を有する事になり、その證明の困難はそれを主張するものよりも、反てそれを否定する者にかゝつて來るといふ妙な結果になる。吾々が死と共に意識も消滅するのではないかと思つて見たのも、唯だ肉體が崩壊すると云ふ事實からの事で、若し意識は少くとも部分的に肉體から獨立してゐると云ふ事が、經驗に依て實際であるとすれば、肉體の破壊と共に意識が消滅するといふ事は何等理由のない考へである。

心理學者ベルグソンは精神の働きについての概念と組織、その計畫と遂行の全體に亘つて立派に認めて居り、その上特に睿智に關する専門的の著書を出して居る人である。而も斯程まで深く考へてゐる人にして尙ほ哲學書を構成する物質分子の結合したものゝ分泌の結果から生れたのであると考へてゐる。

るのは、吾々には何うしても解せないのである。個人的智力の働きは既に事實に於て明かである。そこに論議の餘地はない。若し強てその働きを掩はんとせば、眞しやかな、そして、あの組織的な自己暗示に俟つより外はない。

脳は疑ひもなく思想器官である事に於ては何人も異議はない。けれども、以前信ぜられてゐた事と矛盾するのは脳の全部が思想又は生命に必要なものではないといふ點である。

前に述べた記憶の混亂に就て引用した諸例の外に茲にも同じ結論に到著する面白い二、三の例がある。

博學な予の友人エドモンド・ペリエは一九一三年十二月二十二日、科學協會での講演中にロビンソン博士の觀察をも紹介して居る。それは脳が軟塊になつて了つて、全く化膿した腫物に過ぎない状態をなしてゐても、殆んど一年の間は何の苦痛も感ぜず、精神的異狀も表はさずに生活して居つた人に就ての研究であつた。一九一四年七月にはハロボー博士が、ネッケル病院で、或二人の少女に行つた手術の結果を外科學會へ報告されたが、その少女はメトロポリタン鐵道から落ちたのであつて、頭蓋骨を切開した時には、脳の大部分は本當に軟塊になつて了つてゐたのを確めた。そこで、患部を清め、水分を去つて再び傷口を塞いだ。少女はそれで全く癒つて何の異狀もなかつた。一九一七年三月

二十四日には科學協會に於てデバン博士は負傷兵の手術で腦の部分的截除が少しも智的の働きに故障を及ぼさない事を示した。その他、腦の僅かな部分が残つてゐて、而も精神は依然として完全であつた場合もある。實際、この種の例を擧げると幾らもある。解剖學者が手術した場合、メスの先に靈魂を見出し得ないとすれば、そこに靈魂が存在しないからである。醫者や生理學者が腦そのもの、性質以外に何等靈的能力を認めないと言へば、それは彼等が自己を欺いてゐるのである。人間の中には腦の灰色、又は白色をした物質以外に或るものが存在するのである。

思考の能力は一般に腦の條件による様に思はれるのであつて、その能力は腦と同様に、年を経るに従つて漸次に弱くなつて行くとする説には吾々は反對する。漸次力を失ふといふのは器械である肉體の事で、精神ではないのであるまいか。偉大な精神勞働者の中には死の間際までも、心神が極めて完全な状態の下に働いてゐるものがある。今日の人々は巴里のヴィクトル、ユーゴー、ラマルテーイン、ルグー、等の文學家、ティエール、ミネー、アンリ、マルタン等の歴史家、そして又、バルテルミ、サン、レール（一八〇五——九五）又はシエヴリユ（一七八六——一八八九）の様な學者を知つて居る。彼等は皆、非常な老年に至るまで青年時代の如き頗る健全な精神を持つて居つた。

思考する人、或る生理學者達は長い間この名稱の下に人類を定義してゐたのである。然うである。

水素、炭素、窒素、酸素などの諸元素の分子が化學的結合したからとて、それが物を考へると云ふ事が果して有り得るのであらうか。

生物學は極く最近の科學である。宿命論的生物學は一種の哲學になつた。此の哲學の領域は心靈的現象は生理的反應の結果であるとして考へるのである。けれども、この生理學的説明は單なる比喩的の言葉に過ぎない。それから推してもこの哲學の價值が窺はれる。人々は言葉の發明を偉大な發見の様に思ひ、假設的の叙述を本當の説明だと思つてゐるのである。

筋肉運動の純物理化學的起原に就て最近の發見があつても、感覺と生命の原理とは、今日も昔と同様に依然神秘なものとして残されてゐる。けれども、生理學的現象と相並んで、又はその上に、活氣のある、そして自治力を有つてゐる智的原理の存在——この存在を認めて始めて何物も容易に説明され、理解され得る——するといふ事は何人も否めない事實である。

予は前に最もありふれた常識の靈魂表示に就ての例を引用して置いたが、これを以下各章に涉つて代表的に掲ぐる顯著な例に比べると頗る薄弱なものであつたと云ふ事を、特に茲に斷つて置く。

醫學上の見地から考察しても、單にその肉體組織だけでなく、智的原理の方面に對する注意も亦極めて必要な事で、非常に有利な結果を齎すのである。實際、藥で治療する事の出来ない病人が、心理

的療法で癒つた例が幾らもある。催眠術や、暗示による治療法がそれである。又、エピダウルスの殿堂や、エスキュラピウス（希臘の醫の神）崇拜時代から、ラウルデスとその敵手の時代まで、所謂宗教的信仰の奇蹟と稱へる治療法があつた。彼のホモエオパチー療法の如何はしい數粒の丸藥が見に角ある種の病疾に奇功を奏したではないか。信念は山をも動かすのである。

精神は肉體ではない。それは肉體から出るのでもない。肉體と精神とは全然別な物である。人の意思は各個人によつて認識される。意思の善惡、犠牲の精神、勇敢な性格、苦難に對する耐忍力、そして又、かの殉教者達が殘酷な拷問に屈せざる強い意思、反抗、信仰、美德と罪惡、友情と憎惡、慈悲と嫉妬——これ等の心理的現象を觀じ來ると、心靈が全く腦から獨立してゐる事の明かな証據ではあるまいか。

世間には物事に就て少しも考へる事をしない人がある。吾々は罕に斯様な人に會ふ。併し、多少考へる一般の人々は飲む事、食ふ事、女の機嫌を取る事より外に、更にもつと重大な或るものが存在してゐる事を知つて居る。彼等は一寸考へて儼かないと感ぜられる世界が、さう果敢なく終るものではない。この世には混亂した影の外には何ものも見事が出来ないが、而かも永遠に自分の生命を托すべき世界のあるべきを、臆氣に想像して居る。そして彼等は一様にその世界に憧れてゐるので、有ら

ゆる宗教は彼等のこの感情を満足させやうと試みたのである。

若し、人體とその自然的機能を解剖して見たなら、肉體が五官に色々な魅力を與へる事は事實であるが、單にその實質だけを考量する時、概してそれは存外つまらぬ物である事を必ず認める。肉體の眞の貴さは、それに宿つてゐる精神、感情、睿智、藝術及科學に對する尊重の念に在る。人の價値は短かい、脆い肉體にあるのではない。自己を表現する心靈——永遠に生きて行くこの生命にあるのである。

更に又、肉體は生氣のない物質ではない。器械人形ではない。生きた有機物である。生物、人間、動物、植物の構成を考へる時、そこに何うしても原子を支配する創造の力、智的原理の存在を認めない譯にはゆかぬ。若し、單に指導のない物質分子の集合したものであるならば、世界は決して進歩してゐない。混沌たる状態が無限に繼續する。そしてその間に何等數學的法則もなく、宇宙の秩序を維持してゆく法則もなかつたであらう。

宇宙機關論者の説に依ると、すべての物は何の意識なく必然的に結合した結果に過ぎない。創造は智的無であつて、その智的無は一時何物かを示して、そして結局單なる考へに終らしむるのであると云ふ。吾々はこれ以上滑稽な、そして吾々の觀察と矛盾した假説を想像する事が出来やうか。

神秘的な自然はすべての物に精神を與へた。併も、自然の中にも惡を含んで居る。若い少女は自分の心を引きつけて自分の妻となつた。彼女は獨りで自分の美しい身體を苦しめた。彼女は人類の絶滅を防ぐ爲めの犠牲となつて、母性としての苦痛を体験した。そして彼女はそこから彼女の幸福を見出さんとしてゐるのである。彼女が妻となるべく自分に寄せた最初の媚は果して何を意味するか。媚とは何んであるか、愛とは何、嬉しい誘惑とは何、心の苦しみとは何、感情とは何、自然の無聲な言葉は明瞭に自分に聞えないものか。二匹の鳥が巢を造るとは何のことか、巢に就て居る母鳥が、轉て父鳥となるべき鳥に養はれてゐるのは何んであらうか。親鳥が巢立つた許りの雛の口に餌を運んで來るのは何事を物語つてゐるのか。牝雞と雛との關係とは一體何んな事であるのか。讀者は卵の中の又は胎兒の心臓の最初の鼓動について考へた事があるか、花の受精を解剖した事があるか。若しそれ等の中に自然に説明されてゐる秩序、意思、計畫、一般的目的、究極性やすべての支配力を有する心に考へつかないならば、そして又、生命の中に世界の組織の至高の目的を發見しないならば、それは白晝太陽を見逃したのと同然であらう。

この神秘的な力は何處に吾々を導いて行く。吾々は何んにも知らない。生命がこの法則を吾々に課す限り、吾々の住む惑星は一時間十萬七千吉米の速力を以て、空間の中を通つて吾人を運んで行く。そ

して其の惑星も亦世界の組織を支配する力と十四種の運動に翫ばされてゐるのである。吾々は又太陽の百萬分の一の容積に過ぎない原子の上に棲むところの考へる原子である。それ程太陽は大きい。然かもその大きな太陽も亦、更に更に巨大な星雲の中の一原子に過ぎない。そしてその星雲も亦他の無數の宇宙に包圍されてゐる一つの宇宙である。絶對無限の廣大、驚くべき膨大な運動、そして想像も及ばぬこの迅い速度！

力は原子に固着してゐるものの様に思はれる。何故かといふと、何處にも運動し得ない原子はないからである。自ら支配力を有つてゐない生物は生活する事は出來ない。恰も廢棄された建物の様に自滅して行く。

ルナンとその親友のベルテローとは、吾々に最も興味のある問題に就てよく議論した。兩人は感情に於て多少の相違があつたが、共に未來の生命に何の希望も有たずに死んだのである。一八九二年八月二日、ベルテローは日に病衰してゆくルナン（一ヶ月後に死んだ）に手紙を送つて、「吾々は孫の成長を見て自分等を慰めやうではないか。それは吾々が科學を以て確め得る吾々の唯一の生存である」と言つた。これから考へても、その精神に於て絶對的の否定を意味してはゐない。そして耶蘇傳の著者ルナンの或る思想と相通じてゐる所がある。

その前日の七月二十日に、ルナンはベルテローに次の手紙を送った。(一八九八年巴里發行「ルナンとベルテローとの通信」より)

『吾々の生涯中の最も重大な行爲は死である。吾々は一般に嫌忌すべき境遇の下にこの行爲を果たすのである。けれども、幻影を以て吾人を欺く事を要しない吾々の思想學派はこの嚴肅な、眞面目な瞬間に在んで特に大なる利益を有すると信じる。』

今予は著書「イスラエル」の第四巻と第五巻を校正中である。予は是非再びその校正を見たいと思つて居る。若しこの仕事を他人に委せなければならぬとすれば予に取つては極めて苦痛な事である。けれども、予が校正せんとする事の大部分は、予以外のものには永遠に分らない事である。唯、神のみ知り玉ふと言へばさう云ひ得るかも知れない。』と

宛然、昔の神學者のやうな哲學者の言ひ分である。彼は矢張り神の信仰を固執して居る。人はポルテールの様に反牧師主義であり、自然神教の信仰者であるのだ。ルナンも恐らく漠然と心靈の存在を許してゐたらしい。

彼の臨終に立會つた養子のブシャリの話に依ると、ルナンは「何も残りはしない、何も、何も、何も、」と宣言して眼を閉ぢたさうである。これが彼の最後の瞬間の印象であつたのだ。單りルナン許り

ではない。他の多くの偉大な人々も亦、靈魂の存在に就ては同じ様な懷疑主義を抱いて居つた。それでも、彼等は矢張り心靈の問題を常に考へてゐたのである。殊にブトレミーの如きは、地球運動の假説程莫迦氣た話はない、無上の滑稽である。そして、思想とは何であるか、心靈とは何を指すか。そこに理外な物はない。若し心靈が個々の人に存在してゐるものならば、それは肉體と同じく自然的なものであると考へた。要するにこれ等の意見はすべて吾々の無智に基いてゐる事は言ふまでもない。

吾々は最後に力の唯一性と物質の唯一性を認めない譯には行かない。この名稱は一八六五年に科學考察の上に與へたものであつて、一八六六年發行の拙著宇宙年代記中に始めて發表したのである。その當時吾々は全く無智であつた。けれども科學の進歩は却て昔の鍊金術師の考を裏書したやうな結果になつた。電子から成る原子の構成に考へても、今日ですら物質なる語はエネルギーに對する近代の考への中に段々消えて行くやうに思はれる。原子は力の中心である。

そこで、凡ゆるものに力本説は適用される。宇宙力本説は各世界を支配する、ニウトンはこれに引力といふ名を與へた。だが、これ丈の説明では未だ不充分である。若し宇宙に存するものが引力だけだとすると、多くの星は一つの塊になつて了ふ筈である。何故かといふと、速く宇宙創成の時代に於

て既に引力がそれ等を一團としたであらうからである。けれども、宇宙には尙他の物が在る。それは運動である。力本即ち活力は凡ての實在を支配する。進化して來た人間には、靈的物力が常に生的物力に伴つてゐるのである。結局この二物力は全く同一な物である。それは自然の精神である。そして、この精神は物質のない世界に於ては無言である、盲目である。否な一般動物の本能中にさへも何等の働きも、その存在も表はれない事がある。人間多數の仕事に在つても意識されない。唯だ少數の物の場合に始めて明瞭に意識される。

予は一九八八年に發行した拙著「ユラニー」に次の如く書いた。

吾々が物質と呼ぶところの物は、科學的分折に依てそれを捕捉せんとする其刹那に消滅する。吾々は力は活動の本であり、宇宙の大支柱であり、總ての組織の實質的根本である事を知つてゐる。乃ち人間にもその本質的根本靈魂を有つてゐる。宇宙にも吾々の解し難い靈的原則がある。予は又、「自然の力」(一九〇六年發行)の中に次の如く述べた。

「吾々は靈魂の表現に關する事實に顧みて、宇宙についての單純なる機械的説明の極めて不充分であつた事、そして宇宙には表面に現はれた物質以外に必ず何物かの存在してゐる事を認める。世界を支配するものは物質ではない。それは靈的である力本である要素でなければならぬ。」と。

この稿を書いて以來、心靈的表現に關する各種の觀察が著しく増加して、實際上記の事實を充分に證明して余りある程になつた。

絶對無言に、そして極めて強く昆虫の本能を支配してゐる精神力は、彼等の存在とその永續を確證して居る。それは精神の力が鳥の生長や、人間や、その他の高等動物の進化を支配してゐるのと同じである。昆虫が蛹の中は一定の形を成さない軟塊であつて、それから蝶に變化するのも物力の爲である。又、ある媒質的組織から、實體的組織に變はる間のその瞬間的生存も歸する所は物力である。即ち物力が一時的實體化をなすのである。

吾々は「宇宙は力本的である」と斷言する。目に見えない思考する力が凡らゆる世界と原子とを支配する。そして物質はそれに従ふのである。

事物の分析は、到る處に於てこの眼に見えない精神の作用を表示して居る。この普遍的精神は凡らゆる物に存して居つて、各分子、各原子を支配する。けれども精神は觸感し得るものではない。稱り得るものではない。無限に小さくして眼に見得るものではない。唯だ彼等は力學的聚合に依てのみ眼に見える物や、生物を組成してゐるのである。この精神は絶對に破壊されない。そして永久的である。

唯物論は極めて缺點の多い、不完全なそして不合理な理論である。それは何物をも満足せしむるまで説明を與へる事は出来ない。ある一定の實體的性質を具へた物質だけを認めるといふ彼等の主張は絶対にその分析を許さぬ一つの假説に過ぎない。實證哲學者等はこの錯誤に捕へられてゐるのである。物質はその本質的性質によつて凡らゆる物を支配するとする假説の、全然眞理でないと云ふ事には幾多の實驗的證據がある。彼等は生物は勿論、物質さへ動かす動的智力を考量してゐないのである。

吾々はジュレー博士と共に、古典派の學者達は少くとも最小から最大を導き出した進化論哲學の一般的難問題を解明する力はないと言ひ得る。

本當に意識してか、或は無意識での事は分らないが、兎に角、唯物論は近來全階級に亘つて擴まつて來た。けれども分析を経ない事物のほんの外観だけの學説である事は前に言つた通りである。

吾々は唯だ、實驗的方法から唯物論を排するのである。そして吾々は古典的唯物論の凡ゆる誤謬を立證しなければならぬ。彼の標準精神生理學も亦遠く事實に反して居る。人間には或る性質を具へてゐる化學的分子以外に確かにある物が存在する。それは物質的でない要素、即ち心靈的原理の存在を信ずる。事實の公平な説明が最も雄辯にそれを吾々に示して居る。それは全然物理的意味を離れて作用する物である。

第三章 人は何であるか、心靈は在るものか

吾々は總ての先入觀念から離れ、全く自由な心になつて眞理を求めなければならない。

デカルト

唯物主義の理論が全然證明され得ないものである事は既に述べた。その理論は嘗て考へられてあつた様な爾く堅實な基礎の上に立つてゐるのでは決してないのだ。それは彼等自らが稱へてゐる様に幾何學の定理や、數學的確率に例へる事は出来ない。その代りに吾々が極めて自由に、勝手に凡らゆる方面から取調べ得る問題である。

肉體の破滅した後尙ほ心靈が残存するものであるか何うかを知る前に、先づ心靈なるものが一體在るものか何うかを知る事が先決問題である。既に存在しない物としたならば、それに就て論ずる事は全く愚の極である。思想が腦の作り出す物としたならば腦と共に滅して了ふ譯である。

智識は科學的確實な觀察と實驗的方法に依て始めて得られるのである。けれども事實、今日まで

の心理學は唯だ言葉の上の問題、理論上の冥想、假説的事柄を取扱つて來たまでであつて、要するに傳統的な考へに過ぎなかつたのである。吾々は此の際、絶対にこの傳統を避けねばならない。吾々は何處までも實際の觀察に依つて心靈の性質を決定し、その能力を究めやうと思ふ。

遺憾乍ら、心靈の能力は今日まで殆んど知られてゐなかつたと云ふ事を認めない譯には行かない。そこで、何うしても新心理學を科學の上に建てられなければならぬ。 *Metaphysic* (純正哲學) の語原はその創始者アリストートルの分類の中には「肉體の後」と云ふ意味であつた……けれどもそれは屢々忘れられた。

吾々は肉體の破滅后にも尙ほ生き續ける爲めには、精神的に存在するのでなければならぬ。そこで、吾々の心靈とは箇々に存在する物であらうか、吾々は實際に心靈を有つて居るか、更に適確に言へば心靈であるのか、是れは最初に答へられなければならない問題である。最初に決めて掛らなければならない點である。

既に述べた通り、唯物論者、實證主義、無神論者、心靈否認論者達は、宇宙には唯だ物質とその物性があるだけで、外には何にも無い。人類のあらゆる事實は、この手取早く分り易い理論で、何もかも説明出來ると思つて居る。併しこれは全然間違つた考である。吾々は之に反對な事柄を證明せねば

ならぬ。

心靈とは何であるか、又この言葉は何處から來たのか、それは何を意味するのか。

今日まで心靈の信仰は純正哲學上の學說や、又はその神聖なる事を要求する神の啓示に基礎を置いたものであつた。けれども、それは何等證明されてはゐない。宗教、信仰、情操、願望、恐怖等は證據にはならぬ。

如何にして心靈の觀念が人間の心に起つたのであるか。

Soul (心靈) といふ語と現代語の中の同意義の語 (例へば *Spirit* の如き)、又は古語の *Anima*, *Animus* (*λνμος* といふ精神の意味から來た羅典語)、羅典語の *Spiritus*、希臘語の *πνευμα* 或は希臘語の *λνμος* (氣息) に似た意味サンスクリットの *Atma* (靈魂) 等の語はすべて氣息の觀念を表示するのである。そして、*Soul* 又は *Spirit* の觀念はこの氣息の觀念の原始的表現であつた事は疑ひない。

Psyche (靈魂、精神) といふ語も希臘語の *ψυχη* (呼吸するの意) から來たものである。

生命と思想の本質を呼吸の現象と同一に視てゐた古代の觀察家は、呼吸を失つた肉體、心靈を取去られた肉體、そして死體の崩壊する否定すべからざる事實と、死者の幻影即ち幽靈に對する信念——死んだ肉體がたとひ如何に分解しても、灰になつても永續する生命についての信念とを強いて一致さ

せなければ満足出来なかつたのである。それ故、彼等は呼吸と心靈は死の瞬間に肉體を棄て、去り、何處かで自身の生命を保つてゐるのであると考へてゐた。

今日でも「最後の息」といふ言葉は死を指すのである。併し、或る人々が假し眼に見えない形を以て生命の永續する事を認めたとしても、他の人々はこれを以て、唯だ後に残れる者の感情や、名残や、愛情の表現に過ぎないものと見る。往昔、人間の種々の群が出来た始めから、人間の信念を二つに分ける所の著しい相反した理論があつた。一は唯心論で、他は唯物論である。けれども兩方共にその根據は等しく皮相的な見解に基いてゐるに過ぎなかつた。

茲に Soul (心靈) と Spirit (精神) の意味を深く驗べなければならぬ。この二つの言葉の間には根本的の差異がある。生きた有機體の性質と、靈的要素とは實質的に異なる物である。

概して人々は、この世界には絶対に争ふの余地なき唯一の實在、即ち對象の實在、物質の實在、更に言ひ換へると、吾々が見たり、觸れたりする事の出来る物又は五官の範圍内に來る物の實在のみと考へ、それを確信してゐる。そして他の凡ての物は、彼等にとつては何もかも抽象であり、空想であり、又無であるのだ。

普通の人々や、學者の多數はこの考へを固執する。併し、彼等にも誤りは免れない。右の場合は正

しくそれである。

予は「物理學は、その外觀が殆んど争ふ餘地のない有力な證據を有してゐる時ですら、先づ疑を以て嚴密に試験されなければならない事を吾人に教へるものである」と言明した友人デュランド、グロ―に同意する。太陽や、全天體が吾人の頭上を廻つて居るのだと考へる。成程一寸見るとこれ以上明白な事があらうか。凡ての時代、凡ての人々の眼は何の疑もなくこれ等の事實を全く確實な事と明言してゐたらうか。否な、もつと仰々しい事が信ぜられてはなかつたか。それは唯だ錯覺に過ぎないのだ。天文學はそれを證明した。

彼等は單に表面上の觀察から推論して、彼等の所謂經驗的事實と稱へる「太陽は光を發する圓盤で、吾々の頭上を東から西へ、日の出から日没まで廻轉するのだ」と教へて來たのである。これが幾千年の間人も吾も何等異議のない事實としての宣言であつた。如何に吾々の學說なるものが、知識の批判に於て皮相的なものであつたか分る。然らば科學が、「この所謂觀察によつて實證された眞理」なる物を、如何にして大膽にも明白な誤謬であると斷じ得たか、そして現在全世界の人々が何うしてその誤謬を納得するに至つたか。

最も良く理解され可き事——正確に、そして眞實に肯定し得る事實、即ち實際の觀察の結果による

事實といふのは「太陽が圓盤である」云々と云ふ言葉を以て表現さるべき事ではない。それは表現の誤りである。若し本當に實驗者がその經驗によつて知得した事實を嚴正に表さん事を欲するなら、即ち絶對の確實性を示さうとするならば、彼は「吾々が太陽と名づけた物は輝く圓盤の様に見える。そして又太陽は東から西へ動くものと思はれる性質を有つてゐる」と表現すべき所である。況して太陽は球であるから、この圓盤と斷じた事から既に誤つた形容である。

感覺と知覺とを混同してはならぬ。知覺は證明を要する事實である。予は稻妻の閃きを見、大砲の音を聽く、これを最も正確に表せば、予は大砲の音を聽いたと思はれる。予の眼には稻妻の閃きと見えたと言ふべき所である。けれども、生理學者は屢々この區別に無智である。彼等が觀察した事實として興へる事は、嚴正に驗べて見ると、それは屢々推量された事で、本當に觀察された事實ではない。それ等は自分の心の作用を勘定に入れない觀察から速斷された歸納である。「予の眼に映じたものは直徑これこれ位の輝く圓盤の様な物で、日出から日没へかけて空を横切つて動いて行つた」と言はゞそれは眞實の告白である。少くとも物の確實性に關しては何よりも實驗に基かねばならぬと云ふ自分の主義に従つて、飽くまで言明し得る權利を超越しない説明である。けれども「予は確かに圓盤が空中を横切つて行くのを見た」と言つたなら、それは實感を超越した説明であつて、兎角誤りを惹

き起す恐れがあるばかりでなく、是の種の觀察はすぐその誤謬を證明される。實際斯様な例は茲に一々述べる必要はあるまい。吾々はある感覺、觀念、情緒を経験する。それは本當に直接な實感である。確實な唯一の知識である。そして絶對に信用のおける價值を有つてゐる事實である。

故に對象から得る觀念は感覺、知覺、概念を意味する。だが、これ等の物は一體何んであらうか。對象その物に附いて居るものか。否な、この感覺、概念は對象に直面して感じる、認める。理解する事に依て生れ来るものである。故に、そこに感じたり、見たり、理解したりする何物かある事を自ら證明してゐるのである。

更に正確に言ふと、感覺、認識、理解はそれ自身に於て絶對的基礎の上に得られた事實、即ち直接の觀察が吾人に與へた唯一の事實を形造つてゐるものである。

この論法の形式は決して昨今に考へられた事ではない。實に一六七四年マルブランシエの議論以來用ひられて來た方法である。吾々は宇宙、物象、生物、力、空間及び時間等は唯だ感覺によつてのみ判斷する。吾々が實在について考へ得る總ての事は、心又は腦の中に存在するのである。けれども、その事から吾々の觀念が實在その物をも形つくと決めて了ふのは不思議な論法である。これ等の印象には原因がある。そしてこの原因こそ吾々の眼、感覺に對して外來的の物である。つまり吾々は入

り来る像を映す鏡である。

パークレー、マルブランシエ、カント、ボアンカレー等の純粹觀念論は、餘りに懷疑主義に陥つたものである。けれども一應彼等の主義に當つて見やう。

皮相的な外觀を黜けて、外界は吾人に見える物ではないとせなければならぬと云ふ事は一面から確かに眞理たるを失はない。若し吾々に眼や耳がなかつたなら、世界は全く異なつた物に思はれたであらう。そして吾々の網膜は餘程變つた物に構造されてるかも知れない。視神経は赤の最端から紫の最端までの間、即ち一秒間に三八〇兆から七六六兆までの振動を認むる事が出来るばかりでなく、紫外線を超えた振動をも見る事が出来るかも知れない。或は又、それが電氣の振動や、磁氣波や、現在吾々には未知な隠れた力を見得る神経に置き代へられる事が出来るかも知れない。他の惑星に棲む者の觀る宇宙は、吾々の科學的組織のそれとは全く異なつた物であらう。故に、若し吾々だけの感覺を獨り眞なりと思ふならば、それは餘りに自負に過ぎた誤り方である。眞の自然は全然異つた物である。吾々は未だそれを知らない。けれども、心は當然それを研究すべきである。

予は感じる、予は思ふ——これが現在の確實性を保證する唯一の仕方である。眞の証據である。そして又、この資格を與へられる唯一の價值である。そして、眞の觀察から否定すべからざる確實性を

有する唯一の事實が、歸納推理の方法に依つて第一次的事實として受け入れられ、この根元から生れる第二次の重大な事實は即ち意識となり、思想となつて残る。

この根元は自ら二つの要素に分解される。即ち主體と客體である。換言すれば、感じたり、考へたりするものが主體である。感ぜられたり、考へられたりするものが客體である。十八世紀のパークレー、二十世紀のH、ボアンカレーの如く觀念主義の哲學者は極端に先走りして、唯だ考へる主體が存するのみである。吾々の感覺だけが吾々に經驗されるのである。客體たる外界の事物の存在を條件としないままで考へて居る。

それは餘りに誇張された説である。それは純唯物論に全く正反對をなすものである。而かも尙それよりも誤りが少ない譯ではない。

凡そ眞實であり、斷じて辨駁を許さない事實と云ふのは、吾々が現に考へるものを知る事と、そして吾々は究極の實在や、事物の本質や、外界の本體は唯だ外觀のみしか覗ひ得られない。その他に就ては未だ全然無智であると云ふ事丈である。

吾々は事物の實在が反科學的であると知つたと假定せよ。さすれば吾々の感覺は唯だその事實の一部をのみ表はすものであつて、而かも事實を變形するプリズムを経て来るのである。若し地球が常に

雲で掩はれて居たならば吾々は太陽も、月も、惑星も、恒星も知らないであつた事であらう。そして、人間の知識は未だに宇宙の組織を知るに至らずして、種々に途方もない誤解やら、迷信に陥つてた事であらう。けれども、吾々が今、既知の事柄と云つても、未知の事柄に比べると全く話にならぬ程僅少なものである。事實吾々の視神経は一部分を説明して呉れるのに過ぎない。

錯覺は吾々の觀念、感覺、情操、信念の不安定な基礎を成す。そして、最初の根本的錯覺は地球の不動といふ考へとなつて表はれた人々は自分等が宇宙の中心に安定してゐるのであつて、凡て他の物はそれに從屬して居るのだと信じた。天文學が如何にそれを證明しても、吾々は徒らに當てもなくその眞理を探り、それに觸れん事を求めてゐた。何の効果もなかつたのである。風もなく、空はよく澄み渡つて、有らゆる物が平和に満ちてゐる麗しい靜かな夏の夕を想像する。その時、吾々は眩暈する様な速力で天の深みを走つてゐる自動車の上に在るのである。

人類は極て無智な状態にある。そして、自然の組織は吾々が眞理を求むる上に少しの助けも與へないといふ事を覺らない。吾々の感官は總ての物に向て吾々を欺く。唯だ科學的研究のみが吾々の心にある光明を齎らす。

斯様に、吾々の立つて居るこの惑星の恐ろしい運動でさへ、吾々は少しも感じないでゐるのであ

る。それは固着した位置に安定してゐる様に思はれる。上下前後左右何物も動いてない様に考へられる。けれども、吾々を載せた地球といふ大自動車は一時間十萬七千吉羅米の速力で太陽の周りの軌道を疾走してゐるのである。而かもその軌道は正しい曲線ではなく、螺旋狀を成してゐるので、地球はその創成の始めから二度と同じ道を通過した事はない。

同時に地球は二十四時毎に地軸の周圍を一廻轉するので、吾々が頭上と思つた所も、十二時間の後には足の下になる譯である。この地球の自轉は巴里を通る緯度では一秒間三百五十米、赤道では四百六十五米の速度で廻る。

地球は常に十四種の運動を繰返して居る。その中の一つの運動さへも吾々には感じない。例へば毎日吾々の生活に直接關係してゐる潮の干満、一日の中に二回まで大陸を三十廻も上下するこの偉大な運動を吾々は知らないでゐるのである。而かも若し潮の干満を測る直接の目標、即ち海岸がなかつたなら、吾々は永久に潮の干満ある事實を認め得ないであらう。

又、吾々は秒時の間も呼吸せずに居られない空氣の重さを感じた事があらうか。人體の表面は常に一六、〇〇〇匁（三千六百八十三貫余）と云ふ強大な空氣の重量を支へてゐるが、それは内部からの壓力によつて平衡されてゐるので、扁平にならずに生きて居られるのである。ガリレー、パスカル、

トリチエリー等の偉い學者の現はれる前までは、誰れも空氣に重量があると考へてゐなかつた。それは強ち昔の人の智慧のない許りではない。自然その物が既に吾々に斯様な事を感じしめない様に出來てゐたのだ。けれども終に科學はそれを證明した。

空氣中には吾々の知らない種々の流れが錯綜して居る。電氣もその一部分である。昔は怖ろしい雷鳴の時でなければ電氣の表現を観る事が出来なかつた。太陽は九千三百萬哩を距れた吾が地球に向つて、絶えず磁力を放射してゐる。地球上の磁針はそれから著しい影響を受けて居るが、吾々の感覚はこの作用を表はすことが出来ない。唯だ二三の極めて敏感な、そして微妙な有機體がこの電氣や、磁氣に類した作用を示す。

吾々が一般に光と稱へる物は、一秒間に三百八十兆から七百六十兆（赤から紫迄）に至る。エーテルの振動數の範圍内の物だけを見る事が出来る。けれども、此の外に、三百八十兆以下の遅い振動數を有つてゐる赤外線や、七百六十兆以上の速い振動數を有つてゐる紫外線も亦、同じく存在して自然の一部を占めて居るが、それは吾々の網膜には映らないのである。

又、吾々の耳には音と呼ぶ物の中、唯だ一秒間三十二振動から最も鋭い氣笛の三萬六千振動に至る範圍内に於ての音響を聞き得るだけである。

吾々の嗅覺は香と呼ぶ物を、極めてそれに近似した物として受入れ、そして香を發散する物の中のあるものをのみ感ずる事が出来るに過ぎない。唯だ動物の嗅覺は人間のそれに比べると著しく異つてゐる。

それ故に、吾々は感覺の範圍の外には自然界には光も音、響も、香もないと考へる。それは唯だ吾々人間の中だけで勝手に決めた事である。換言すれば吾々の印象に應じてこの様な言葉を作り出したのに過ぎない。光は熱と同様運動の一種である。そして、空間には晝間も夜間も同じく光があるといふのは、夜間も晝間と同じ位のエーテル振動が廣大な宇宙に亘つて彌漫して居るといふ事である。音響も運動の一つの變形であつて、吾々の聽官には噪音に過ぎない。香は空氣に存在する微粒子から來るので、それが特別に吾々の嗅神經を刺戟するのである。

吾々地上の生物には肉體の外部に在る世界を知るべく唯だ三つの感覺を有つてゐただけである。他の二つの味覺と觸覺とは肉體と接觸して始めて作用するのであるから、これは外界の事物に對しては直接役に立たない。従てこの二つは吾々に事實に關する知識を齎す事はない。

吾々の周圍にはエーテルの振動、空氣の振動、力、吾々の知覺する事の出来ない、そして眼に映らないものが在る。是は科學上からも亦絶對合理的な事實である。吾々の周圍には見る事の出来ない物

許りでなく、見る事も觸感することも全然出来ない、少くとも吾々人間には解し難い物の存在する可能性はある。予は斯かる物の絶対存在を主張するのではない。存在するかも知れないと云ふ。この考は事實の發見に先んずる全く科學的な、そして合理的な系説である。

吾々の知覺器官は必ずしも事物の眞想を受け入れない。時には地球の運動、空氣の重量、放光、電氣、磁氣等に關しても全く虚偽の又は誤つた印象を與ふると云ふ事實が、既に一般に認められ、證明されたので、吾々が現に見た事でも、それが必ずしも眞實と考へる譯には行かない。反て見た事實の反對の現象を認めなければならぬ事さへあるのだ。

實際眼に見えない物が吾々の周圍に存在する事を疑ふのは不合理である。微生物が發見される前に吾々はそれに就て考へた事があつたらうか、それは何百萬と群つて居る物であつて、實に有機體の生命の大分を占めてゐるのである。外觀は眞實を示さない。そこに吾々によつて直接に感知される唯一の眞實がある。それは思考である。人間の中に絶対に否定すべからざる眞實な事實は精神の存在である。予は以前の著書に於て既に此の結論に到達してゐる。本書は更にその事實を詳かに證明すべき使命を以て生れたのである。予は茲に、既に拙著「リーメン」及び「自然の力」に於て述べた事を再び繰返す事を許して貰ひたい。それは此際この觀念を呼び起すことが甚だ必要だからである。

吾々が曩に唯心論で、なくて觀念論者であると言つた彼のアンリー・ボアンカレーは、彼の常に懷疑的な説にも似ず、佛蘭西の學者で工藝學校の教授であつたボチエの晩年に就て次の様な事を書いた。

「彼を殺した病氣は非常に長引いて、慘酷なものであつた。彼は十二年間も手足の自由を奪はれ寢臺に又はソファハーに横はつた儘屢々苦痛に悩んで居つた。そして危険に瀕した事が毎年幾回もあつた。終に彼はあらゆる自由を失ひ、再び起上る事が出来なくなつた時、彼の寢床には唯だ彼の二つの眼だけが生き残つてゐる様に思はれた。けれども、彼の心靈はこの慘酷な病魔の心なき力よりも強かつた。彼は人々の手に擁せられて、工藝學校や、鑛山學校に行つた。そして少しでも苦痛の和らいでゐる時は彼は病を忘れて以前から趣味を有つてゐた仕事を繼續して居つた。斯かる間に段々病衰してゆく彼の身體にも、理性だけは毫も曇りなく輝いてゐた。それは恰度、城壁が刻々敵彈に破壊されて行き乍ら、尙ほ司令官の不抜の勇氣に依て最後まで頑強に敵對する要塞のやうであつた。彼の死の數週間前、彼は新たに考へ出した或る研究に要する數學の書を二三冊持て來て呉れと予に頼んで來た。彼の思想はその最後の日まで死より強かつたのである。」

この記事が、精神主義者でなく、懷疑派の學者に依て書かれた事を考ふる時、吾々は眞理は最後の

勝利者である。星夜の真中に煌いてゐる彼のシリウスの様に、永劫消えることなく燃えてゐると云ふ事の事實を疑ふ譯には行かぬ。

實際、アンリー、ボアンカレーは、外部世界の實在さへも疑ふが、尙ほ精神の存在だけは信じて居ると、個人的に予に話した事が屢々あつた。この考へも餘りに偏してゐる様に思はれる。吾々は何事にも誇張を避けなければならない。

結局、吾々は自分に感じる事をよく知つてゐるのである。予が本書を編み、事實に立脚して眞理を覓めてゐる間、正に一切の私心を去り、主義に偏せず、單純にこの著述をなして居るの予はの肉體ではなくして、予の心であると感じる。予は身體を所有する。けれども、予の身體が予を所有するのではない。吾々の意識は吾々の直接の印象である。その意識は吾々が説明する事が出来、又、説明しなければならぬ吾々の印象の上に立つて居る。印象は吾々の總ての論証の基礎である。

人間の定義は、骨骼を包める肉の組織、酸素、水素、窒素、炭素等の分子の結合。六疋の骨、十五疋の蛋白質と纖維素、五十疋の水の割合で構成されてゐる物。神経の集束である等の言葉に依てのみ與へられる事が果して出来やうか。

若し右の定義を持出す位なら、ボナールの定めた「人は器官を使役する智である」の定義の方が餘

程進んで居る。

人は自らそれを知つてゐると否とに拘らず本質的に精神であると宣言したい。人は己れの中に正義の觀念を有つて居ないだらうか。ある過失の爲めに正當に罰せられた場合に、子供は自分の罪がそれに値する事を知らないであらうか。そして又、子供が無實の罪で罰せられた時、彼は其不當の罰に對して反抗しないだらうか。何から道德的良心が来るのであるか。人の祖先は第三紀、第二紀及び第一紀地質時代の動物である。その動物は爬行動物から漸次猿に進化した。けれどもこの道德的良心殊に人間の子供が本能的に有つてゐる正義の觀念は、これ等の動物の腦にはなかつた。吾々はこの觀念が、第一次的祖先から第二次的祖先に、そして、それが教育の力で出来たものであると言ひ抜ける事も出来やう。けれども、その教育なるものは一體何處から來たのか。これは實に精神界に屬する問題である。この智的、精神的、道德的世界と腦の物質の物理化學的作用との間には何等共通の尺度はないのだ。

意思は確かに智能の範疇に屬するエネルギーの一つの形である。今一例を擇る。ナポレオンは世界を征服せんとして、凡らゆる物を彼の野心の犠牲にした。埃及出征からウオーターローの戦に至るまでの彼の行動——些細な彼の動作をも檢べて見よ。如何なる心理學も、化學も、物理學も、機制論

も、彼の人格、觀念の持續、忍耐力、強情を説明する事は出来ない。大腦の働きか？ それだけでは不充分である。腦の中には別に思考するある物が存在する。腦はその道具に過ぎない。見るのは眼ではない。考へるのは腦ではない。

望遠鏡に依る星の研究は、器具や、眼や、腦でするのではない。それは觀測し、發見する天文學者の精神に屬する。人間の意思はそれ自身に於て、眼に見える、觸感される物質的世界と異なつた思考する靈的世界の存在を證明するに充分である。

意思の力はあらゆる物に顯はれて居る。吾々はこれに就て簡単な例を挙げ得る。

予は安樂椅子に腰かけて、兩手を膝の上に置いてゐる。

右手で左手の指を一つづゝ上げて行く。その時指は自然に落ちて元の位置に歸る。

併し、若し予が命する時には指は落ちないで、上つた儘になつてゐる。

この指の筋肉に作用するものは何か。それは唯だ意思である。

故に、物質に作用する精神的力が存する。この力は腦と聯絡がある。——それは言葉なくして作用する。けれども矢張それは觀念である。この觀念が物質に作用するのである。內的根原は腦ではない。腦の振動は單にその結果であるに過ぎない。

意思を働かす人は運命の創造者である。

特に人間の思想に就て考察して見やう。

思想は心靈の存在について不斷の證明となる。吾々が反省する時、單に「思ふ」又は「考へる」と言ふ時、或る問題に就て考へる時、抽象的又は概括的の力を働かす時、心靈の存在を確める事が出来る。

人間の有する物の中で、最も貴重な、最も個人的な、そして最も獨立的な物は思想である。その自由は何物の拘束も受けない。物質的な力は肉體を苦しめ、肉體を獄に投げ入れ、又それを驅使する事が出来る。けれども、思想に對しては何物も加へ得ない。如何なることをしても、如何なる事を言つても、思想を制裁する事は出来ない。思想は凡らゆる物を嘲笑し、輕蔑し、そして支配する。それは俗世間的の又は宗教的の偽善から伴りに誘はれた時でも、政治上又は商業上の野心がそれに虚偽の假面をかぶせた時でも、常に之に反抗して、元のまゝの姿を保ちて、その眞に欲する事のみを知つてゐるのは思想である。これは腦と全然獨立して靈魂の存在を示す明確な證據ではなからうか。

思考する力を有する物、それは單に物質でもなければ、分子の集合でもない。腦が感じたり、考へたりするのだと主張するのは頗る莫迦氣た話である。最も滑稽な事である。それは恰度、電報に表は

れた發信者の思想が、電池から生れたものと言ふのと同じ事である。

精神、思想、心の統制力、それ等は物質でも、力でもない。引力に作用されて太陽の周圍を回轉する地球。落下する石。流るゝ水。原子間の結合を弛め又は緊める熱等は一方から觀れば物質である。他方から觀るとエネルギーである。思想、理性、そして或る計畫に伴ふ事物の方向、それ等は全く異なつた原理を啓示する。

バーヂルの名著「エニード」の第六卷にある次の名句を知らない人はあるまい。

宇宙に存在するすべての物は、

同じ原理の下に一つに移す事が出来る。

心靈とは、それは生ける物質である。それは實に此の大なる肉體と混合してゐるものである。

詩人は眞理を語つた。宇宙は精神によつて支配される。吾々が人間の中に存在する精神を研究する時、それは肉體的エネルギーでも、物質でもない事を認める。精神はその二つを使役する。時には精神は意思に従つてそれ等を支配する。

人格の存在に關する證明は無限に在る。一々それ等を茲に擧ぐる必要はあるまい。事實、各人は屢々この人格の意義を理會する機會はなかつたらうか。

吾々は毎日、目前にこの證據を有つてゐる。逆境に處する堅忍。貧窮を脱せんとする精勵の示すエネルギー。崇高な目的への献身。國家の安寧に捧ぐる犠牲。勝たんとする意思。宗教又は科學の信徒。信仰の爲めの殉教者。この様な實例はすべて心靈の存在を自から語つて居る立派な證據ではなからうか。人々が考へるやうに、腎臓や、肝臓の分泌物に似た大腦から出る物質的分泌物が智的人格を造り得るものだと、如何にしても考へられない事である。

「動物經濟に及ぼすクロロホルム及びキュレー」(南亞の土人が矢鏃に附して動物を射るに用ひる毒素)の影響の研究より見た心靈の實在」に就ての極めて獨創な證明は、一八六八年道德及び政治學協會の通信員ラモン、ド、ラ、サグラ氏に提出された。氏は一八七一年にキューバ島で死んだ人である。

エーテル又はクロロホルムの蒸發した氣體を呼吸すると、一般の感覺は麻痺する。故にこの異常な生理状態に置かれた人間は、最も恐ろしい手術を、少しも感ずる事なしに施される。そしてこの影響を受けた人は、鋭利なメスでその組織や、神経を切り離しても何の感じもない。殊に普通なら苦悶や恐怖の叫びをあげる無惨な裂傷にも、切口にも全然無感覺であるばかりでなく、屢々靈妙な快感がこの不思議な眠りの間に、心靈によつて經驗される。

ラモン、ド、ラ、サグラはこの現象を心靈の存在に關する科學的證明であるとして提出した。心靈

と肉體とは確かに同じ物ではない。それは茲に明かに分離されてゐる通りである。肉體がメスによつて苦められてゐる間に、心靈は一箇の獨立體として思考する事を続ける。こゝに人間全體の二要素は麻酔作用に依て分離される。この篤學な西班牙人は彼の妻に試みたクロロホルムの作用に對して非常に感動した。彼女は意識を喪つた間にも、その思想には何の變動もなかつた。知識にも些の影響を感じなかつた。彼女は外科醫ベルノアルが彼女の肉と神經とをメスで切開してゐる間にも、醫師と平靜に話した。そして寧ろ常よりも氣分が快かつたと彼女の夫に語つた。

吾人は又、ナンシーの學校で、催眠術に依て苦痛を鎮めた實例をも知つて居る。

心靈と肉體との間の區分——否な、その分離——は催眠狀態、睡遊狀態、磁力現象、或は二重人格の狀態に於て、種々の條件の下に觀察された。心靈の表現は全然肉體組織から獨立して居る事を説明するものと思はれた生理學的の假説は、この點に於て全然不充分であつた。吾々の今日まで教へられた生命と思想との概念は將に崩潰せんとしてゐる。

凡らゆる物は人間の心靈が肉體とは全く異なつた實體である事を示す。「心靈」と云ふ事は決してその語源に含むやうな呼吸の意味を有たない。それは純然たる智的體である。實際多數の言葉は段々その語源から遠ざかつて行く。例へば Electricity (電氣) は *ektros* (琥珀) から來たのであるが、今や

全然意味が違ふ

吾々は自然の物質と何等共通する所のない超自然的能力の存在を證明する事によつて、この人格を實證しやうと思ふ。

第四章 未知又は多少未知の心靈の超自然的作用

予が小兒の時分は小兒相應に語り、小兒相應に考へた。そして成人した時、小兒らしき凡ての物を放棄した。

使徒 ボール

凡そ何んな研究に於ても、吾々が直ぐ眞理に到達するを得るものと夢想するのは寧ろ小兒らしい考へである。吾々には始めから確實な考へはないのだ。殊に、吾々の感覺、吾々の觀察力、吾々の智力は絶對な眞理を発見するには不適當である。科學の中でも最も正確なものは天文學である。精密な觀測に依つて確實の域に達し得られる。天文學は算術、代數、幾何と同様に几帳面な科學である。吾々の棲む惑星即ち地球は太陽の周り、一億四千九百五十萬吉米の軌道を一周するに三百六十五日六時九分九秒を要する。太陽の大さは地球の百三十萬一千倍、重量に於て三十三萬二千倍である。火星は太陽を中心にして二億二千八百萬吉米の軌道を六百八十六日二十三時三十分四十秒で一周する。そして火星の一日轉に要する時間は二十四時三十七分二十二秒である。之に較べると、物理、化學、動物、植物

地質學等遙に確實味がない。人體生理學や醫學も同様であるが、心理學に至つては更に甚だしい。諸學校に於て、唯だ標準的な議論の下に假設された從來の心理學教育も餘程改修される必要がある。

心靈の常規的官能——古典教育の對象物であり、そして唯だ慣習的に又不變的に表明されてゐた理會、推理、及び意思——が腦と關係なく存在し、永却不朽なものであると言ふ事の侵す可らざる確かな證明として考へられて居なかつた。そこで吾々は別な方面からこの問題を解決せんとして來たので、これから更にその解決に向て邁進しなければならぬ。人間は凡らゆる物を思索する。思想は一の事實である。この基始の事實を捉へて、現在に於て未知の又は多少未知のものとされてゐる或る心靈官能が、吾人の研究に値する何等かの題材を提供しないものであらうか。そして、これを細心に分析して行く事に依て、今日まで餘りに長い間の人類の無智を啓いて心靈構成の問題に一道の光明を投じ、吾々の極めて狭い知識を聊かなりとも加へ得ないであらうか。そして又、今日まで幾多の人々に依て無益の論議を反覆され、徒らに同一軌道を往來して來たこの未決の大問題が、幸ひに吾人の手に依て解決の曙光を得、茲に、新たに萬人の認容し得る様な新心理學を打立てる事は出來ないものであらうか。人類は何時までも投獄の運命に在る事を恐らく欲しないであらう。

前章述べ來つた所に依て、吾々は今や心靈が肉體を離れて獨立して存在し得るや否やの問題を實驗的に研究すべき立場に在んだ。若し鐵、酸素、水素、ラヂウム等の原子の様に、思索官能を附與された心靈の原子なるものが果して存在するものとせば、それは器官の作用が停止した後に殘存し、而かも有機體の生命の過程に於て腦髓の物質的變化にも、觀念の變化にも何等影響されることさへないに違ひない。茲に「形體のみが死滅する」といふ強い原理が依然として眞理となつて殘る。

既に吾々は心靈的人格存在の可能なる事は生理學的に立證された事を諒解した。吾々は更に進んで腦の物質にも有機的、化學的、機械的結合、即ち本質的である諸官能にも歸する事の出来ない心靈官能の表明に依て、この心靈的人格の存在を證明する事が出来る。

心靈の獨立性に關して特別な證明をなすところの意思は、尙ほ他のこれを立證する幾多の官能（特に精神の獨立獨在性を證すべき心靈作用を指す）と共に後章に研究することにする。そして先づ第一に未だ調査されてゐない、又は未だ本當に了解されてゐない官能、即ちシャルル、リシユーの都合のよい巧妙な表言を繕りて言へば所謂形而上的官能を指摘したいと思ふのである。

例へば、「未知の事柄を認識する。寧ろ豫知する心の力の如き」さうである。

豫感とは何であるか。往々にして非常に確實性を示すこの心靈作用の性質は何であるか。

予は既に久しい以前からこの研究に没頭し、多くの觀察を集めて比較検討し、論議して來た。

諸者の中には、自分が一八九九年に於て心靈の種々な作用や、その表現に關する解剖的研究に著手した事を記憶するゝであらう。そして此の研究の最初の結果は拙著「ランコニー」(アルス發行拙譯)の中に公表して置いた。これは實に二十年前の事である。その後も、自分は尙ほ多數の觀察者から様々の通信を受けた。そして最善の記憶と最全の誠實を以てすら人の回想は、兎角その輪廓を失ひ易く、すべての證明を多少にても曖昧にするものである事を深く承知してゐる自分は、それ等の通信を努めて虚心坦懷に、些の私心を加へず検討する事を以て自分の最大の義務とした。けれども、一見常規を逸した事實、換言すれば故らに奇を銜つた様な事柄はその儘認容する事を避けた。唯だ、一寸考へると莫迦氣な様な事柄でも、一概に拒否する事の出来ないものもある。眞理は兩極端の中間に在る。吾々は眞理は却つて眞の如く見えない事が往々あるといふ事を忘れてはならない。

今、言及した拙著「ランコニー」を讀まれた人は、明確な原因を有つた豫感の例に注意されたであらう。例へば同書一〇六頁(拙譯「未知の世界」の頁以下同じ)に掲げた遠く離れてゐた父が臨終に際し、恰もその時何も知らぬその子の大學生が深く悲嘆してゐた例。三一八頁の久しい間會はずにゐて、而かもたつた今思ひ出した許りのある博士に會見した醫學生の例。三二二頁の父が異郷で危篤に瀕してゐた時刻に非

常に不安に悩んでゐた一婦人の例。三二九頁のある一労働者が一種の不安に襲はれ、自分の仕事を罷めて家へ駆けつけて見ると、その時刻に妻が荷馬車に倒されて負傷して居つた例。三三〇頁の遠方の友人を訪ねた人が、荐りに歸心が動くので、友の引留むるのも聽かず、急いて歸つて見ると、小兒が馬脾風に罹つて四人の醫師に取巻かれ、極めて危険の状態にあつた例等がある。以上の諸例に見る豫感は若し思想の傳達でもなく、ある種の訴への表現でもないとするれば、少くとも靈波の傳達である。吾々は茲にこの靈波の研究をして見よう。

次に掲ぐる豫感は特に注意する價值がある。

内務大臣で閣議の議長であるコンスタン氏は、一日、その夫人と共にジュヴィジイの予の天文臺で會食中に次の出來事を自分に物語つた。

「一八八九年、佛蘭西憲法の改正に就てブロンチス將軍及びその與黨と激烈な議論を戦はした時であつた。或る朝、彼の事務所で、郵便物と共に一冊の書籍を手渡された。彼は急いで閣議に出る時であつたので、それを卓の上に抛り出して、その書類の何んであるかを確める事を夫人に依頼して立ち去つた。恰もその時、夫人は女中に髪を梳かせてゐたので、その書類を膝の上に乗せて開き始めた。夫人は初めは多分從兄から祈禱書を送つて來たのだと思つた。けれども夫人は、三日以前に何か怖ろし

い物の豫感に打たれたそうである。それを思ひ出した彼女は非常に用心して、半ばその書物を開いた時、それは必ず忌むべき物であると考へた。そこで小包を女中に渡して「必度、汚ない物だから入口の室へ持つて行きなさい」と命じた。女中の立去るや否や、夫人は着掛けのまゝ、髪を脊に垂れた儘、入口に走つて來て、「開けるな、觸れるな」と叫んだ。それは何故？

夫人は警保局長のカッセル氏を呼んだ。そしてその物の取調べを頼んだ。彼女は、それが何等かの穩かならぬ秘密が絡つて居ると感じた爲めである。カッセル氏がその書物を振つて見た時幾つかの肩片が卓の上に落ちた。彼はその肩にマツチの火を近づけると、すぐ燃え出した。彼は危険物と認めて縣廳の試験所に持つて行つた。果してその書籍には充分大家屋を破壊するに足るダイナマイトが入れてあつた。これを聞いた夫人は驚きの餘り氣絶して八日間も病んだと云ふ」

以上はコンスタン氏とその夫人が會食中十二人の者に向つてされた物語である。

内務大臣の夫人は危険を豫感した。豫感した許りではない。その危険を甚だしく感じたればこそ彼女に着掛けのまゝ、將に書籍包を開かうとした召使を止める爲めに玄關脇の控室に駆けつけたのである。

この例の如きは吾々普通の視力を以てしては到底見る事の出來ない心靈上の一種の內的幻影を示す

ものではないか。この印象を犬の嗅覺に喻へ得るが、併し兩者の經驗の間には著しい相違がある。

この話を聞いた數日後に、予の友人で、警察本部の實驗所長ギラード氏は、特に予の爲めにダイナマイトの分析の結果を報告して呉れた。

コンスタン氏夫人は同席上にて、もう一つ他の豫感の例を話されたが、これも同様注意に値する經驗であつた。

あらゆる事柄を調査し、検討せんとする予の試みに贊助された夫人の主治醫レッセゲ博士は慇々左に掲ぐる通信を送られた。

レッセゲ博士の手紙(第九八〇信)

『コンスタンス夫人が或る豫感に襲はれた結果、藥劑師の送つたある藥の服用を拒んだ問題に就ての貴下の御照會に御答致します。唯だ、私は誰の爲めといふことに關係なく、恰度歴史家がある事柄を叙べる様な考へで書かうと思ひます。

コンスタン夫人が二十三歳の時分、ツールーズに住んで居りましたが、或日彼女はジフテリアに罹り、當時其地に居つたレッセゲ博士を病床に招いでその診察を受けました。博士は鹽酸で夫人の咽喉を洗ふ様にと勧めたので、夫人の母は鹽酸と覺しき一瓶を彼女に與へました。その時患

者は非常に衰弱してゐたのですが、「その藥は鹽酸ではありません、それは私を殺す藥です」と言つて洗ふ事を拒んだのです。そして幾ら勧めても聴き入れません。そこで醫師は彼女を安心させ、又自分もそれを確むる爲めにマツチの棒を小瓶の中に投じて見ると、棒は眞黒に焦けました。それは硫酸であつたのです。

私の記憶に残つてゐる限りではこれ丈です。けれども私の處方箋に對して藥劑師が非常に誤つた處方をしたのを、コンスタン夫人が強い豫感からその服用を拒絶した事実は今尙よく覚えて居ります。

尙私はこの事に就てより多くの材料を蒐めやうと思ひ、當時の舊いノートなどを調べて見ましたが、外には何も書いてありません。唯だ、それはジフテリアの場合であつた事だけは分つてゐます。私の處方箋は二瓶要るので、一つは腐蝕劑で、一つは内服劑でした。藥劑師の間違ひは恐らく用法書の混同にあつた様に思はれます。若しコンスタン夫人が何の豫感も起らず、又あつても、それを念頭に置かずにあの腐蝕劑を服用したなら、何んな結果になつたであらうと當時の事を追想しては悚然とすることが屢あります。

先生！最も興味の深い貴著「棲息可能なる世界多々あり」を讀んで、私は非常に感動致します。

した。唯物主義から人類の宗教的渴望を救ふ科學的神學の方面に關して私は久しい以前から先生の門弟でした。冀くば私の眞實なる感謝と敬意とを享けられん事を。

一九〇一年三月十六日

ツールーズにて レッセゲ

(註) 通信の始めに附した番號は予が一八九九年、心靈的現象の研究を始めて以來諸方から報告された通信の順序を示したもので、引照の便宜上特に表はしたのである。中には全然公表しない條件の下に送られたものも多少ある。第四一九信の如きその一例である。

茲に又、疑問の餘地ない豫感の經驗的觀察がある。これは唯物主義者の生理學では到底説明する事は出来ないが、予はこの二件の豫感現象に向て、尙未だ知られてない內的(精神)能力の存在を證明する幾多の同様な現象を附加する事が出来た。これらは深く研究して見ると大に有益な、そして興味のあることであらうと思ふ。

けれども、これ等の現象の多くは、思想の傳達でも、以心傳心的性質のものでもなく、要するに卜筮の一種である。思想の傳達や、以心傳心的作用などの事に就ては、後に特に章を更めて問題にする事として、今、吾々は未知の世界全體の解剖を試みんとして居るのである。

心的幻影に關しては各章に亘つて此等と類似した事柄を研究しなければならないが、茲では夢中に

起る豫感の様な捕捉し難い現象を後述にして、唯だ目醒めてゐる時の、即ち嚴密な意味での豫感と稱するものに就てのみ研究を進める。

巴里の天文臺長ドロオネー氏は、海上に乗り出せば必ず死を招くだらうとの豫感を得て、絶対に航海を見合せて居た。然るに八月、彼の親戚の一人ミロード氏がやつて來て、一週間位の休息を彼に勧めた。そこで、彼等はシエルブルグに赴いた。そして沖に出て歸路に就いた。歸途、突風に遭ひボートは顛覆して兩人共に溺死して了つた。アルセーヌ、ユーセーイ氏もこれと同様な話を彼の著「告白」中に次のやうに述べて居る。

『彼の妹のセシルは一八七〇年の普魯西軍の侵入を恐れて海邊のある町に避難して居た。ある日、彼女の友の一人が、「外洋に出て船遊びをしやうぢやありませんか」と言ひ出した。すると、言下に私の妹は、「海には何うしても出掛けたくありません」と反對した。友達からその譯を訊ねられたので、彼女は、「私がツールンで船に乗らうとする時、一人の伊太利人の女卜者が私に向つてあなたは船に乗つてはいけない、あなたには海は危険ですと注意して呉れました。それでも私はその伊太利人に幾らかの金を遣つて船に乗りました。すると未だ本當に出帆しない中に私は風のために水中に吹き飛ばされましたが、幸ひすぐ救助されたのです。翌日郡長さんの所にその女

のト者が姿を見せました。再び彼女は私の眼を覗き込んで「海は貴女を殺すかも知れませんよ」と言はれました。恚ういふ譯で私は英國に避難する様に誘はれてもそれを拒んで此處に來たのです。」と答へたので、友達も船遊びを止めて陸上の散歩に決めた。

十月十日の事であつた。知事とその夫人、二人の令嬢、二人の姪と私の妹は、パンマルクといふ岬に遊びに出掛けた。パンマルクとは「馬頭」と云ふ意味で、其處は巨大な奇巖怪石が幾つも聳え立ち、その下は底知れぬ深い淵で渦巻を成してゐる。そして怖ろしい激浪の巖に當つて碎けるさま實に物凄いの所であつた。知事は五人の若い女達を連れて「馬頭」の下から荒れ狂ふ怒濤の壯快な光景がよく見える場所に案内した。彼等は岩の上に立つて、恰もオペラへでも行つた様に互に笑ひ興じて居た。彼等が彼處此處と歩き廻つてゐる間、知事は附近のある畫家の家の入口の所で煙草を吸ふて休んで居つた。女達は遠くから自分等の居る場所に知事を促すなどして微塵の不安も感じて居なかつた。

出發の時刻が近づいた。けれども私の妹はこの飽かぬ光景に見蕩れてもう五分だけの猶豫を申し出た。この刹那である。突如深淵から匍ひ上つて來た恐ろしい一と波は、巖上に恐れ戰慄してゐた五人の娘達を呑み込んでしまつた。知事が渦いてゐる海水を凝視した時には最早五人の姿は

見えなかつた。ふと見ると一本の傘が彼の方に漂ふて來た。そして「お母さん」と絹を裂いた様な一聲の叫びが彼の耳に入つただけである。彼は波浪と戦ふやうにして隈なく海上を探し求めた。五人の獲物を浚つて凱歌を揚げた怒濤は影を縮まして、そこには靜かにド、プロホンデイス（海の底から）を歌へる海より外には何物もなかつた。

憎むべき海は再び私の妹の亡骸さへ、一束の髪さへ、一本の傘さへ、扇子さへ、岸の上に打上げて呉れないのだ。唯だ、「母さん」と叫んだ彼女の最後の言葉の外には……

私にこの辛い知らせを齎したのは白鳩であつた。噫あ、思へば巴里籠城の鳩は、未だ曾て吉報を傳へた事はない。」

この種の豫感は殆んど偶然とは云へない程數多くあるものだ。吾々がこれ等に就て正確な解明を求めてゐるのも決して物好きな業ではない。かゝる豫感は正に吾々の研究せんとする心理的現象の一部を成すものである。吾々は時に偶然の暗合の起るべきを認める。けれど三十回、百回、千回と、さう同じ様な偶然の符合ばかりが反覆されるものではない。かゝる不思議な現象を解剖し研究するのが何んで迷信であらうぞ。

次の物語は極めて平靜な心理状態の人に起つた面白い現象であつて、第一には差し迫つてゐて、而

かも何の徴候もない、全然豫知し得ない不幸から受けた感覚、第二には死の瞬間に於ける靈の表現を明瞭に示して居る事柄である。左にこの通信の全文を掲げる。

(第八一四信)

『それは五年前、私の身に起つた事で、如何に貴下が嚴格に科學的見地からお考へになつても恐らく些の疑問の餘地のない事と存じます。先づ私の身柄から申上ねばなりません。

今、私は三十五歳で、身體も至つて強健で未だ一回も幻想の經驗などはありません。實際、私は常から錯覺とか、豫感とかについては疑心を懷いて居りました。

私は地主で自分の土地の耕作に従事して居ます傍ら政府の土地管理人を勤めて居ります。

一八九四年四月二十日午前七時半に私の母オルガ、ニコライナ、アルボーソフは亡くなりました。併し、彼女の死前、何等死の近づいたといふ徴候も、懸念もなかつたのです。母は未だ五十八歳で、別段の異狀もなく、元氣で居りました。そして親子共にコルングテブスコフ地方のフヌーコヴォ村の私の地所——現在も其處にゐます——に住んで居りました。

一八九四年四月二十日(母の忌日)は恰度復活祭の一日に當るので、その前日、私は二三の友人を訪問する爲めに出かけました。その友達といふのは私の宅から二十吉羅米も離れた所に住ん

で居る者で、私は屢々彼等の家で夜を過ごして翌朝歸つたのです。併し、何ういうものかその日に限つて、何とも知れない不可解な豫感が湧いて彼等の家に泊らうとする氣がしないのです。そんな事から皆が熱心に引留めるのも憚らず、その晩は歸つて來ました。途すがら私は何となく不安でした。そして何かの不幸が近づいて居ると云ふ豫感に襲はれてゐました。歸つて見ると、母は例ものの通りの元氣で數人の友と骨牌を弄んでゐましたので聊か安心したのです。

常から母は時々激しい頭痛を感じる事があるのです。是夜も母は頭が痛むといふので、尙客子を聴くと少し頭がづき／＼する丈だと答へました。私は常のやうに「御機嫌克く」と挨拶して寢室に引取り、間もなくぐつすり眠つて了ひました。

私の家は割合に廣かつたので、母と私の室は多少距つてゐました。この兩部屋の間には石の壁があつたのです。

翌朝(四月二十日)、私は冷汗でぐつしよりになつて、今見た計りの怖ろしい惡夢に強い印象をうけて眼を醒ました。事實、それは夢ではなくて幻影だつたのです。その時は丁度七時半(すぐ時計を見ました)でした。母が私の床に近付いて來るのを瞭かに認めました。そして私の前額に接吻して「悴よ！ 私は今死ぬんだよ！ お別れだよ！」と言ふのです。

私が飛起きて母の室に行かうとして居ると、俄かに家の中が噪がしくなり、人々の馳け廻る音を聴きました。是時、母の室附の女中が涙を流して私の室に飛び込んで来て息も絶々に、「奥様が只今お亡くなりました」と叫びました。

女中の話に依ると、母が七時頃起きて孫娘の部屋に行き、接吻を與へてから自分の室に歸り、例もの通り聖像の前に跪いて朝のお祈りを始めた時、動脈破裂の爲めに急死したのです。それは正七時半で、私が母の幻を見た瞬間でした。

親愛なる師よ！ これは是非貴方に御知らせしたいと思つた事柄です。若し貴下の御研究の上に何かの御質問がありましたら何時でも御返事致します。實際この事件は既に貴下へ御報告した様な氣もします。

露西亞、ブスコフ州コロムにて

アルクセス、アルボーソフ

茲に吾々の知識に向つて説明さるべき二つの苦しい事實がある。それは觀察者の語る物が何であらうと、その人の記憶の如何に依つてその表はし方を異にするかも知れない。或は又外國文字の構成の相違から多少誤て傳へられる事がないでもない。けれども、兩者の何れに拘らず事件は事件として獨存するものである。

先づ第一にこの記事は、科學的に認容する事が出来る。即ち凡ての點に於て良く均衡の保たれた元氣旺盛な人の經驗である。天文學、氣象學、又は化學上の觀察、或は他の實際の觀察と同様な注意を以て考察するのは吾々の義務である。こゝに吾々の研究の立場から検討さるべき二つの顯著な事實があるのだ。

アレキシス、アルボーソフ氏は、一八九四年の當時には未だ三十歳の血氣の人で、五十八歳になる母堂と共に露西亞の自分の邸に住んでゐた。彼は自宅から二十吉羅米程離れた友を訪づれ、そこに一泊して翌日歸宅する積りであつた。その晩、彼は恐怖に堪えない豫感の爲めに心臓まで擾亂され、友の引留むるのも振り切つて、翌朝を待たずに歸つて見たが、家には何の異狀もなく、母は愉快氣に友と骨牌を遊んでゐたのである。

そこで、最初豫感となつて彼を襲ふた隔感的感覺の原因が、抑も何であつたらうといふ事は極めて興味ある問題と思ふ。彼の母が多少頭痛を患へてゐたとは云へ、彼女の全體の健康が、その爲めに著しく毀された譯でもないから、原因が彼の母にあるものとは思はれない。吾人は悲しい訴へが肉體的又は精神的に送り出されて、それが遙か離れた所で、ある何かの形になつて聴かれたと云ふ例を知つて居る。アルボーソフ氏の場合では氏の心中に何等かの直覺があつた様にも思はれる。けれども二者

の間には心靈的相通の存在して居つた事は疑ふ事が出来ない。この場合では不可思議な未來の豫幻が伴つてゐるのだ。アルボーソフ夫人は數時間後には死なねばならぬ人ではあつたが、恐らく彼女は自分の死期の近づいてゐる事は少しも覺つて居まいし、又息子にしても母の死などは夢想もしてゐなかつた事は言ふまでもない。

併し、吾人の内には瞭らかな常規の意識意外の或る物が存する。即ち「意識のない」又は「稍々意識のある」或は「感覺となつて現はれざる程の極めて微弱な或る物」——如何なる名稱を附するにもせよ、恚うした他の何物かゝ存在する事を見逃す譯には行かない。

それは實に、吾人の最も奥の方に存在する自我であつて、物質界を超越し、吾々の肉體の前に永久不變に存在し、而かも肉體とは全く獨立して居るものである。それは吾々の心靈であり、その作用は外觀的科學には解する事の出来ないものである。

次に第二の點を考察して見る。

この話の主人は名譽ある地主で、且つ政府の土地管理人である。彼は現在の境遇に充分満足して居る人である。そして何の煩ひもなく靜かに安き眠りに就いた。翌朝、彼が眼醒めた時、滿身汗で濡れて、恐ろしい夢魔に震へ戦いてゐた。一體それは何の爲であらう。彼の母は二室を距つた彼女の部屋

で死んだ。その母が彼の寢床に来て子の額に接吻して永い別れを告げたのである。

こゝに臨終の母自身の行爲は之を疑ふ事は出来ない。それは彼女の靈がその息子の靈に強く響いて、母の幻像を息子の眼の前に現はしたものと考へるのが至當である。併し、吾々はこの現象からして何等かの極めて輕い實體又は半實體——エーテルに類した物が死女のように裝ふて母の部屋を飛び出し、息子の室に來たのだと速断してはならぬ。斯様な解釋は不必要である。けれども彼の母が自分の死を息子に知らした時に、實際自分の姿を現はした事だけは争ふ可らざる事實である。斷じて否定を容さない。

即ち、人體組織中には、心靈、思索する精神、心の意思、愛情、人格等といふ物の存在する事の證據とはならないものであらうか。これ等の觀察は大流星とか、雷とか或は充分に確められた肉體的現象の觀察と同様に確實であり、反駁し難いものである。母が自分自身を息子に感得せしめ、彼女の心の心靈作用が彼女の像に依て表はされたのは兩者の心靈間に於ける交互作用である。

次に示すものも、前者と極めて類似した點がある。これも吾々の研究の爲めに心靈の超自然的作用を齎して呉れる。

「一八八八年十月四日、私の母はミツスーク、オザークから五哩離れた所の自分の家で、五十八

歳を一期として亡くなりました。その當時私は母の家から二十哩程もあるフォードランドに住んでゐたのです。私は二ヶ月許り母に會はずにゐましたが、その間母は各週一回は必度便りをして呉れました。母が命を落した晩、私共夫婦は一歳になる嬰兒を連れて教會に出ました。十時頃でした。未だ教會が終らないで、人々が讃美歌を合唱してゐた時、私はなんとなく母に會はねばならない様な感じが強く起つたのです。そしてその中の大變熱苦し相にしてゐた人を見て、今、私の母が息切れの爲め、苦しい呼吸をして居ると云ふ暗示を得ました。ます／＼それが明瞭に心に浮んで來るのです。もう私は一時も居たゝまらなくなつて、妻にも告げず、嬰兒を隣室の人に頼んで、停車場に馳付けましたが、間に合はなかつたので、線路に沿ふて約七哩も歩き、又別の道に入つて漸く朝の三時に母の宅に着きました。つまり四時間余も通して歩いたのです。

母はたつた今死んだ許りでした。私は母の部屋の扉を叩きましたが返事がないので、勝手に開けて這入りました。是時妹がノックの音に目覺めた所でした。すぐ、「お母さんは」と尋ねますと、妹は平氣で「床に就て居られます」と答へるではありませんか。「おい、お母さんは亡くなられたんだよ」と申しました。

私は既に母の死を確信してゐたのです。私共が母の寢床に行くと、母は疑もなく、數時間前に

本當に死んだのです。母が夜前床に就いたのは十時頃で、常よりも機嫌が良かった位で、翌日は妹と一緒に早く起きて、オザークに行かうとさへ約束して、快よく寢に就てたのです。

トーマス、ガリソン

この話に就て英國心靈學研究協會に於ける調査の結果、妹、妻、並びに近隣の人々に依て立證された所を詳細に發表された。

何等既知の原因もなく、理由もなく、隣席の者に嬰兒を托し、妻にも話さず、折角出席した教會を飛び出し、二十哩の夜道を徒歩して死んだ許りの母の許に馳付けたのである。

瀕死の母の心靈が、息子のそれに作用したといふ事は最早疑ふの余地はない様である。そして、彼の情緒——それは何とも不可解なものではあるが、鬼に角差し迫つた事であると彼を直覺せしめた——を感じたのは本人の心靈であつた、母がこの作用を意識して居たか否かは吾々には勿論分る事ではないが、少くとも母子二人の間に心理的聯通があつたといふ事は拒む事は出來まい。これが吾人の肉體的感覺とは全く獨立した心靈に屬する超自然的作用と呼ばれるものである。

吾々は自由な研究を續けやう。吾々は此の記事を特に悲哀な豫感として分類すべき物であらうか、鬼に角、珍らしい現象である。

吾々はこの種の數百乃至數千の心靈的現象の中から、人間に未知のある力、未解の謎が存する事を立派に證明する材料を得やうとすると、實際選擇にまごつく程澤山ある。例へば茲に比較的最近の一例がある。それは予が本人自身の口から直接聞いた事である。

『巴里に住む一婦人（マダム、マリシャル、キヌスター街二十番地十八號居住）が、一九一四年三月二十六日（木曜日）の晩、恐ろしい夢に魘はれて目覺めた時、臃ろな形の無い一種の變怪^{へんかい}が彼女の寢床に身を寄せて彼女の腕を掴み、二つの怖ろしい脅迫の中何れかを選べと命じた。それは「汝の夫か、娘か、孰れか一人は死を免れない。何れにする」と云ふのであつた。

「擇ぶんですつて？ それは出来ません。夫も、娘も、どちらも」と彼女は身を震はせながら答へた。すると變怪は、

「そりや駄目だ、是非一人は犠牲にしなければならぬ。早く擇べ」と彼女に迫つた。

婦人はどちらとも決する事が出来なかつた。唯だ、怖ろしい苦惱に捕はれ、悲哀に耽^ひくばかりで、實に名狀すべからざる狂亂の状態になつてゐたのである。彼女の夫は當時四十六歳で、充分健康な人であつた。彼はその晩彼女の傍らに寝てゐたのである。婦人と共にこの幻覺について予に話に來た時は、娘は十七歳の美しい少女であつた。婦人はその夫とこの娘に向て等しく強い愛着を有つてゐた事

は言ふまでもない。

けれども、變怪の脅迫は彼女の意思よりも更に強かつた。彼女は遂に一母としての愛は他の何物より強いもの……私は我兒より先に夫を犠牲にしたい」とうっかり獨言を言つて仕舞つた。

婦人はこの夢魘の事は誰にも話すまいと決めてゐた。この事あつて五日後、夫のマリシャル氏は、朝まで何んの異狀もなかつたが、急に不快と疲勞を感じると云つて彼の勤先の海軍電信局から歸つて來て床に就いた。水曜日に醫師に診て貰つたが、さして病氣の徴候も見えなかつた。醫師は輕い流行性感冒だと言つた。然るに翌日になると彼の容態は俄に險惡の模様が現えて來た。遂に土曜日には心臟が止まつた。迎も望がないと宣告された。夫は既にこの世の人ではなかつたのである。氏はそれまで心臟に故障を感じた事などは嘗て一度も覺えがなかつたと云ふ。

予は故らにマリシャル夫人とその娘に、或は別々に或は一緒に色々と尋ねて見て双方の説明を比較し、彼等の不思議な告白の一點疑ふ餘地のないものである事を確めた。

拙著「ランコニー」（未知の世界へ）にもこれと同様な豫告的夢の例を引用してある。忌むべき不吉な現象ではあるが、吾々は如何に之を説明すべきであるか。

それはマリシャル氏が自身の健康状態に聊かの懸念がなかつたにせよ、彼はこの日に當然死すべき

運命であつたと想像するのが最も早い簡単な言ひ方である。吾々が死ぬ時、或る事情の下には單に吾々の未知の病氣の一回の終局であるに過ぎない。たとひ、吾々は己れの健康を確信してゐても、吾々の氣付かない病氣が次第に吾身を衰弱せしめて居るのである。妻の鋭感な副意識が無意識にこの状態を認めてその死を豫感したのかも知れない。吾々の心的人格は現在尙知られてゐないある力を賦與されてあるのだ。

これは無論説明的假説である。單なる假説に過ぎない。

吾々がこの假説を認容するにしても、何故に故らに妖怪の形を以て死を告げたかと云ふ事を考へねばならない。さうでないと言明が成り立たない。

今一つの假説は斯うである。

吾々は兎に角不可解な世界の眞中に住んで居るのであるが、そこには自然を支配する力、例へば引力、電氣、太陽や惑星の磁力等の様な眼に見えない、而かも現實に存在する物があるやうに、生物界にもその發生して居る現象を見たり、自らを表現したりする或る力や、未成の意識を所有する精神とか、思想とかいふ物が存在しないのであらうか。これは大膽な假説ではあるが、今告白された事件を理解する爲めには必要な假説である。つまり眼に見えない或る物が、眼に認められる物となつてマリ

シャル夫人に現はれたのである。謂はゞ夫人が手品師の様に要求された骨牌の一枚を當て出したのである。吾々は常に手品師が手に一ぱいのカードを差し出して自由選擇させるのを見る。併し吾々は他に代るべき札の無い時の外は大抵手品師の欲するカードを擇ぶ。吾々の想像する精神は死を宣告された者は甦て死なねばならぬ」と云ふ事を知つて妻をして自ら夫を擇ばしめた。

予がこの假説を想像してゐる間にも、尙それは不當な考である様にも思はれた。けれども全く許せないものと速断する事も出来ない。この假説から吾々は、彼の守護する天使は眼に見えないが忠實な伴侶であると基督教が教へてゐる事を思出す。それはこの場合に當つて居るか否うかは分らないが、兎に角、吾々の眼前には説明されなければならない事實が横はつて居る事は何人も打消す譯には行かない。

吾々はこの實際の觀察に一致する多くの事實の證據に依て、大氣、更に正確に言へばエーテルが未だ發見されない心的要素を含んで居る事を認めてもよくはあるまいか。空氣の化學成分が酸素と窒素である事がやつと十八世紀に發見された。而も當時は空氣の全成分がこれで完全に理解された積りで居つた。然るに最近に至つて未知の捕捉し難い元素——ネオン、トリプトン、アルゴン、クセノン等——が發見された。而もこれ等以外に尙一層分らない微妙な性質の元素が存在するかも知れない。吾

吾人類の心霊は毎秒肉體を離れて行く。併し、その心霊は果して滅するのであるか。吾々の肉體を離れた心霊が減びるといふ證據は何もない。恚うして肉體を離れ行く心霊は實に一日八萬六千乃至十萬内外を算するのである。從て十日にして百萬、百日にして一千萬、一年にして三千六百萬となる。ヴィクトル、ユーゴーの所謂「萬物は精靈に満ちたり」を信ずるのは恐らく詩人の虚構ではなからう。けれども、この心的要素は吾々の今研究しつつある現象の説明に重大な關係を有つてゐるものではないからうか。

併し、茲に吾々の取扱つてゐる例としては第一の假説の方が最も眞に近い様に思はれる。殊に若し吾々の精神的實在物が自ら脱出し得るものであつて、夢の中に起る様に肉體から離れて吾々の意識外の形を取つて、しかも吾々と語り合ふ事が出来るものと考へるならば、それは一層眞實らしくなる。だが、これは最初は無意識であつて、目覺めて居た時幻覺となつた夢の場合である。

これから考へても、吾々の現に研究してゐる問題の極めて複雑であるといふ事が分る。予が夥多な例の中から故らこの例を提出したのは、本章の題目である「未知又は多少未知な精神の超自然的作」と云ふ事を事實の上に立證した迄であつて他に目的があるのではない。

この例は予の研究を助くる爲めに送られた報告中第四〇三三號に當るものである。

マリシャル夫人の例に類似した話が「エンヂリー」誌（一八九二年三月號）に、ミノー、サベツチ博士に依ても次の如く述べられてある。

「ニューヨーク州の或地方に、ハイデルベルグ大學に留學して漸く卒業した許りの青年が住んで居た。彼は性來想像力に缺けてゐるだけで、外にこれといふ缺點もなく、脊は高く、身體も至極強健で、常から運動家として名聲があつた位である。彼の得意な學科と云ふのは數學、自然科學、電氣であつた。彼が留學から歸國した當座は別段健康に異狀もなく、母と共に田舎の家にゐたのである。或晩、彼は靜かに家に歸り、誰れにも口をきかずに、すぐ床に就いた。翌朝彼はまだ寢床にゐた母の所に來て、靜かに母の顔を撫で下ろして目を覺させ、そして「お母さん！ 私は今、あなたに辛い事を申上ねばなりません。何うぞお氣を慥かに持つて聽いて下さい」と言ひ出した。母は勿論驚いて、何事か起つたのかと訊くと、彼は「お母さん！ 私は間もなく死にますよ」と答へた。この意外な言葉に母は仰天しながらも詳しい譯を話して呉れと迫ると彼は、「昨晚、私が廣場を歩いて居る時、幽霊が現はれて私について歩いて來ました。そして私に、お前は死ぬと告げたのです」と語つた。

そこで母は心痛の餘りすぐ醫師を呼んで一部始終を告げた。醫師は丁寧に彼を診察して見た